

# 山びこ通信

2010  
秋

山の学校  
クラス紹介

Disce libens.

学びの青春時代よ永遠に——It's never too late to start.

文・山下太郎

日本人男子100メートル走世界新記録樹立！これは先日開催された第16回滋賀マスターズ選手権にて宮崎秀吉さん（100歳）が樹立した記録（100m 29秒83）のことを指します（宮崎さんは92歳で短距離走を始め、その後続々と新記録を樹立されている方です）。

現役選手が100メートルを10秒以内で走ることも驚異ですが、100歳まで長生きし、なおかつ100メートルをこれだけのタイムで走ることは、まるで人間業を超えた出来事のように思えます。

この偉業を称えるにやぶさかではありませんが、一方では、スポーツの世界はやはり残酷であり、タイムだけに注目すれば、年齢が若いほど有利に違いない、ということを考えます。実際、どんなに優秀なアスリートにも必ず引退の日が訪れます。つまり、年には勝てません。

それに対し、年齢と共にパフォーマンスの向上が期待できるジャンルがあります。学問や芸術の世界がそうです。たとえば、誰にでも経験があると思いますが、文学作品を読む場合、若い頃にわからなかったことが年齢を重ねて理解できるようになります。

古文や漢文は10代の頃に学校で読んだままになりがちですが、10代の頃に読んで味わえることには限りがあります。20代、30代、それ以降の年代になって読み返せば、読み返すたびに解釈は深まります。

スポーツで言えば、練習をすれば、年齢と共にタイムが速くなるようなものです。これをそのままにしておくのはもったいないことです。語学の勉強にしても、必要に迫られなければ学生時代とともにジ・エンドという人が少なくありませんが、それは、上の喩えで言えば、青春時代に、体を一切動かさないようなものです。

若い時、体を動かしたくてウズウズするように、ある年齢に達すると、勉強がしたくてウズウズし始めます。「学びの青春時代」の訪れです。学ぶ意欲が湧き上がるなら、独学するもよし、あるいは、スポーツ同様コーチについて学ぶ、あるいは、同じ志を持った仲間と一緒に学ぶもよし、です。

独学は学びの王道です（独学する人には何も申し上げることはありません）。コーチについて学ぶなら、山の学校がおすすめです（少人数の対話型授業）。この秋学期から大人向けのクラスをいくつか新たに開設しました（漢文、英語、イタリア語、フランス語、経済学）。有志による学びの場としては英語の読書会もあります（高校生から一般の方までが参加）。

かく言う私も、ラテン語の読書会を山の学校の同志といっしょに週一のペースで続けています。一万行の詩ですが、ようやく残り数百行というところまで来ました。終わればまた最初からスタートします。70歳、80歳までこの読書会を続けることができるなら、現時点で見えていない「何か」が見えてくるはずで、今から楽しみにしているところです。

（北白川幼稚園長・山の学校代表 山下太郎）

## ● しぜんを生かした「箱庭づくり」～自由な世界

しぜんクラスでは、春学期に始めた「箱庭づくり」が秋学期に入っても続いています。二週間に一度のクラスですが、その創作意欲は途切れることなく、教室に着くや否や「早くつくり始めよう！」という声上がるほどです。作業スペース確保のために使い始めた「かいが室」ですが、今ではたくさんの工具や材料が並ぶ「工作室」にもなっています。

**<道具に親しむ>** 工作に必要な道具類の中でも、のこぎりやナイフ、金づちといった工具を用いる作業は、油断や誤用をすると、危険を伴います。まず、ピリリとした空気を作り、皆さんにそうした認識の上に立ってもらうところから始めます。「のこぎりの時は、必ず軍手をして」「ナイフの刃が向かう先に、お友達がいないか、自分の手がないか」などの、安全面の約束を守ることが第一です。また、道具が傷まないよう清掃し、後片づけをすることも肝心です。そして、「のこぎりの刃はどのような仕組みか、部材をしっかりと押さえて切るにはどのように構えたらよいか」「接着剤を使うには、どのような工夫が必要か」など、道具の機能と適正を理解しながら、うまく使うコツを体得していけるよう、指導しています。

実際クラスでは、学年に関わらず、果敢にのこぎりや釘打ちにチャレンジする姿があります。穴開けドリルを使えるようになる人もいます。正しい道具の使い方と心構えを学び、次第に使えるようになること、それに伴い、創作の幅が広がることで、自信と喜びを得て欲しいと願っています。副次的ながら、この取組みの、大きな狙いのひとつです。

**<素材に親しむ>** また、箱庭の素材に「しぜんのものを生かす」ことを目標にしています。時に、工具を用いながら木材の硬さや手触りを感じ取り、時に、箱庭に植えるのに丁度よい大きさの草木を探しに出かけ、小さな草が驚くほど深く根を張っていることを発見します。「これは手強い」となると、私も応援に駆けつけますが、がっしりと根の張った土を掘り起こそうとして、鉄のスcoopが逆さに曲がってしまったことさえあり、脱力して、みんなと笑いました。森の中の地面の奥に覗いた漆黒からは、熟成した土の香りがむせぶほどに湧き出てきます。

他にも、紙コップやストロー、紙粘土など、教室の中で見つけた素材も利用します。「あ、これは、あれに使えるぞ!」「先生、こういう材料はないですか?」各自が、思い描く形を具現化したい一心で、使えそうな素材を探し、時にリクエストします。自宅から持ってくる人もいます。

「本当に水を張れる池を作りたい」と考え、ビニールを土の中に敷き、紙粘土で囲いを作り始めた、FY君。しかし、ビニールと粘土との間を塞ぐことが困難であり、紙粘土は水に溶けてしまうことが「感触として」次第に分かります。発泡トレイのような容器を埋め込む方法も一つですが、彼の思い描く理想とは異なります。そこで、必ずゴム手袋を着用する約束で、簡易セメントを用意しました。セメントも元来、天然の素材に人の知恵と工夫を加えたものであることを伝えます。

選んだ素材で思い通りに作れないことも、植えた植物が枯れてしまうこともしばしばです。しかし、はじめから成功法を伝えることはしません。まず、考えた通りに試してみて、うまくいかなかったときは一緒に原因を考えながら、次の手を示唆します。この試行錯誤の繰り返しにより、素材の特性や、「向き不向き」を本当に理解することが出来ます。

**<手触りで感じる自然/命>** プツツと茎から採っただけの草は、次に会う時、萎びています。根から採って植えた時でさえうまく行かず、落胆することがあります。初夏には沢で見つけた沢ガニやヤゴを何人かが持ち帰ることがありました。しばらくは元気だったようですが、大半は長生きすることができませんでした。人の手に身を委ね、物言わずに死を遂げる、こうした小さな命たちは、静かに何かを教諭してくれます。このようにしなければ命を学ぶことの出来ない私たちに対し、体を投げ出してくれる彼らは、優しく、寛大です。箱庭用の草探しの時、「これ、採ってもいいかなあ・・・?」という迷いが、みんなの中に、少なからず起こる場面があります。「無闇やたらという訳では無いからね・・・」そんな時は一緒に悩みながら、「ありがとう」と思って採ること、その後大切にすることだけを、みんなと約束します。小さな命たちが、こうした肌触りの体験の蓄積として、みなさんの心の奥に、ひそやかに生き続けてくれることが、私の願いです。しぜんの限りない優しさに抱かれて、私たちは生きています。今はそのようにまで思わずとも。箱庭を通し、一番伝えなかったことです。

そうした理屈を脇に追いやるほど、「つくる楽しさ」というものが本能であるかのごとく彼らの内にスパークしているのを感じます。それもまた、喜ばしいことです。ここからは、各箱庭の制作プロセスと見所をご紹介します。



・U君の庭(上) 箱庭角の水受けに入れた水が地中のストロー管を伝い、池に滴ります。置き石に当たり、静かに注がれる所が彼らしさ。池を囲む数々の愉快な仲間たち。箱庭完成後、ユーモラスな人形も作ってくれました。反転させると顔が変わり、思わず爆笑!



・H君の庭(左)。夏に作り始めたクリスマスの世界。U君同様、全体に雪化粧が施されています。白い鉢底石を金網で削って降らせました。ツリーに見立てた杉の葉がピツタリ。繊細な粘土細工。大人っぽい静けさの漂う世界。



・Nちゃんの庭(左)は「まめごまランド&学校」。彼女の箱庭は、一つの部屋、基地のようでもあります。リモコン付テレビとアンテナ、冷蔵庫等の家電、数々の玩具、二段ベッド。ジャムの瓶には、木製の金魚を2匹飼っています！



・FY君の庭(左)。アクリル絵の具を練り込んだセメントの色は、緑が苔、青が水を表現。岩の洞穴は木の実を貯蔵した鹿の住処。小枝で作った草をはむ鹿は、ジャコメツティの彫刻を彷彿させる繊細さ。

彼の「いきものランド」には動物への愛情が溢れています。



・Iちゃんの庭(左)。アイスクリームにスイカ、こま等、小物から作り始めた「Iちゃんのきいろのいえ」は、素朴な温かみがありながら、天蓋つきベットのバスタブと豪華。車はかなりのカッコよさです。車輪はちゃんと回ります！



・R君の庭(右)。今学期から来てくれた彼は作り始めたばかりですが、一気にここまで形にしました。木の葉や木の実を散りばめた「夏の庭」。石を積んだ部分には穴が覗いています。「風穴」なのだそうです。

・Sちゃんの庭(下)。植物の定着に苦労しましたが、今は中央に緑の丘があります。庭を一望できる見晴台、背もたれの角度も心地よいです。セメント製の池には、流行りの給水システム搭載。傍に船らしき造形も。動物はあと足1本で完成ですね！



・T君の庭(左)ここまでくると「城」です。これまでに3つ分の箱庭を完成させたと言えるほど、大変化を遂げてきました。この勢いが彼の素晴らしいです。緑も苦労の末、よく定着してくれました。こちらの給水システムは塔型。もう一本立てます。



・SY君の庭(右と下)白へび群団の庭は、その名残を残しつつ、樁を挿し木した花壇のある飛行場に。外界から箱庭へ導くスロープを上ると見晴台。そこから地面に降りる梯子は小枝と接着剤で作成。四つ又の小枝を逆さにして葉を挿したテントも素敵。



・NY君の庭(左)引っ付き虫のある草を植えました。紫の花がアクセントです。たくさん並んでいる紙コップ、これらを用い何か面白い装置を考えているところです。角にある紙コップは「落とし穴」。中は暗いけれど、色々入っていてゾクゾクします。番外編でダンゴムシの家も作りました。



・M君の庭(左)ここで飼っていたカタツムリは、鉢底用白石で海を表現。苦労は会う度に脱走していたので(笑)家へ連れて帰りました。今は、2匹を植えると、砂浜は緑の丘に。建設中の家は何週もかけ根気よく作っている力作です。

(文責：梁川 健哲)

## ● 「今」を感じて描く

『季節』というものを、描くことが出来るでしょうか？或いは、『今日』という日を。」初夏に、そのような問い掛けをしてから表へ出て、目にし、感じ取ったことを各々が教室に持ち帰って描く日がありました。「ライオンだ！」「亀になった！」雨上がりの青空にばかりと浮ぶ雲を見ながらそんな言葉が交わされます。「春だったら桜を描くのにな…」そう呟く Su ちゃんに、「この青々と茂った『桜』はどう？」と尋ねてみます。園庭には、園児たちの置き傘が開かれ、日を浴びて並んでいました。ちなみに、クラスの冒頭では『フレデリック』（レオ・レオニ作）を読みました。



U 君作のピロ。まだなっていない実まで想像し、水彩色鉛筆でさらっと描き上げました(左)。「やっぱり桜は春！」と言わんばかりに満開の桜。削用筆で花びら一枚ずつ丁寧に描きます (Su 作/右)。



雨と風の中を、傘たちが楽しそうに舞います。4 つの傘に、性格まであるようです。雲間からは晴れの兆しが (M 作/左上)。I. I ちゃんは、園庭に並んでいた傘が、お花のように咲いている様子、傘の花を表現しました (上中)。Sa ちゃんは、石段の傍らに咲いていた花を描きました。独特の質感を感じさせる質感の対比と構図です (上右)。H ちゃんは、夏の象徴をちりばめました。初夏の爽やかな空気。ミツバチが見上げる先には、亀の雲が浮びます (左)。



## ● 自作の道具と、黒いインクで

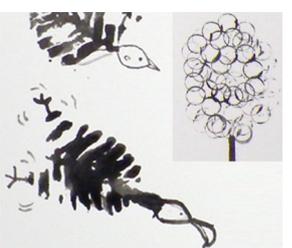
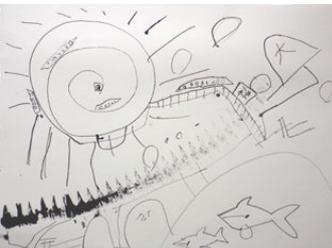
「人が、初めて絵を描いたときは、どんなだったでしょう。」そもそも絵を描くには何が必要か、という問いかけに、筆や絵の具など、様々な画材が挙がります。「景色など」の描く対象が必要であることに気付く人もいます。当り前に思っている事を、一つ一つ確認できました。でも、原始の人たちは今日のような筆

や紙を持っていなかった。では、どうしたのか。アルタミラの洞窟の絵も紹介しつつ、みんなで想像します。

この日、皆さんには、原始人のような気持ちになってもらい、しぜんの中で見つけた「道具」で描くことに挑戦してもらいました。道具のタッチを強調するため、敢えて黒一色で挑戦し、その後、彩色との組み合わせも試します。また、自作つけペンとの書き味を比べるため、漫画に使われるつけペンも用意しました。多様なタッチにご注目下さい。



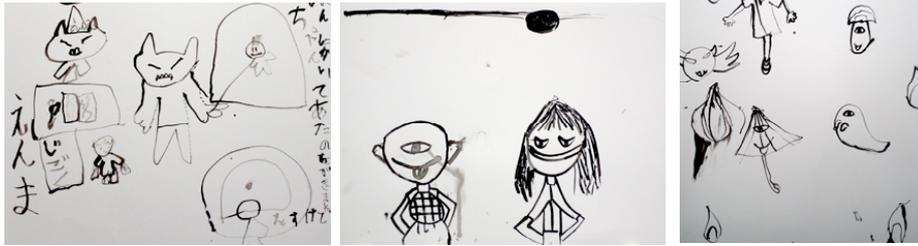
クモやムカデ、小枝で描いた恐怖のテーマパーク (SY 作)。パンダの兄弟 (T 作) とアザラシの家族 (OI 作)。味のある線がかわいさ倍増。



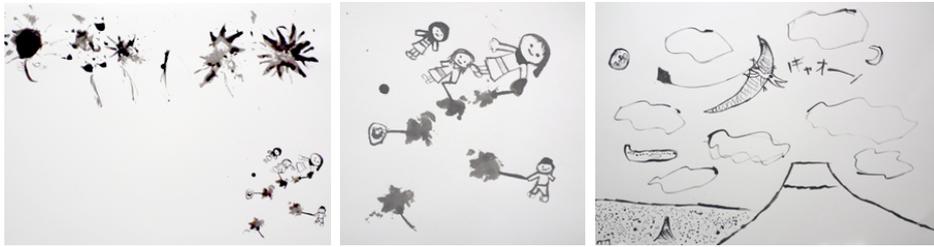
京都から太陽の中心まで続く線路！インクをつけた割り箸ペンを転がしたら面白い線が描けました (K 作)。

インクをつけたシダの葉を、小枝で丁寧に押さええます。鳥の足の感じが本人も会心の出来。木の部分に見られる正円は、木の実のカサです (H 作)。

「黒」のイメージから連想された妖怪やおばけたち（左から I.I, M, Su 作）。木枝の折れ口等で描いた線のゆらぎが怖さを演出。と同時にどれも、どこことなく可愛いです。



かねてペン画に興味津々だったM君がGペンで即興的に描いた3点。大文字山の絵に感動した1年生がまねて描いていました。チンパンジーの表情、質感も見事。KI君の時空を超えて飛ぶ翼竜。点描で表した都市の遠景が素敵ですね（左）。



花火によって葉の種類を使い分けたスタンプング。火花の音まで聴こえてきます（左上）。

絵の具や筆や紙。それらがあることは、ちっとも当たり前ではなく、素晴らしいことなのです。また、それらの使用を制限することは一見型破りにも見えますが、幼少の頃は誰もが、石ころや小枝、指ひとつあれば、地面や曇りガラスに絵を描いた体験を持つはずで。どちらの感覚も忘れないでいることは、絵画の可能性をより広げるのではないのでしょうか。

### ● 「デザイン」の入り口 ～自己表現の延長として

絵を描くことは「表す」だけで成立しますが、デザインはある目的を持ち、受手へ「伝える」分野です。その面白さを体験して欲しい一方で、今の皆さんには、あまり第三者を意識せずのびのび描いて欲しい思いもあり、1.自分マーク、2.マイ・キャラクター、3.ポスターの三つの中から課題を選択し、取組んでもらいました。



二人で相談しながら一緒に描き、見開き3項の絵本『みもとらのいちにち』が完成（Su, I.I 共作/左）。最近3Dに凝っているSY君は3Dシアター付きの塔をデザイン（下左）。野球やサッカーの試合を紙の上で再現するK君。一試合全ての軌跡が一枚に残る斬新な絵（下右）。



自作キャラクターをポスターにした二人。必ず家族や仲間が登場するところが素敵です。（左から OI, T 作）



前課題の流れを汲むM君のペンと頭文字の判子（右）U君は顔マークの判子（下）。I君は自分マークを木で作し、スタンプとペンとのセットに（右下）。



将来の夢、「ほかほか保育園」を開いた時の園児募集ポスター。「あかちゃんおいで！」（Sa 作/左）。この「かいたがクラス」のポスターを作ってくれたHちゃん、Mちゃん。曜日や時間、クラスの数まで記してくれました（左の上と下）。

（文責：梁川 健哲）

## 『辞書となぞなぞ』

こく語じてん ことばがいっぱい たのしいな (Hちゃん)

上の俳句で私がまず印象に浮かんだのは、「1年生になったら、友達100人できるかな」という歌の歌詞でした。それに代弁されるように、1年生の間は未知に対する憧れの強い時期だと感じます。

このクラスでは、最近の生徒たちの興味に応じて『辞書作り』をしています。あ行、か行、さ行…と、1週ごとに5個の言葉を国語辞典で引き、その意味をカードに書き写しています。前号では『しりとりカルタ』を完成させたことをお伝えしましたが、今またその第2弾という調子で、新しくカードが増えていくことを楽しんでいます。

辞書を開くと、新しい言葉とあたかも友達になるチャンスが増え、文章の輪も広がります。そのように辞書引きは有益なことには違いありませんが、単に生徒の自主性に任せるだけではなかなかうまく根付かないところがあります。またいくつ引いたから立派という持って行き方も長続きせずによくありません。

辞書との付き合いが一生のものになるためには、ちょうど自転車がそうであるように、最初のうちは大人が後ろで補助し、辞書の内容を「通訳」する必要があると考えます。読み仮名の不備に対する補助も意外と無視できない役割です。また生徒がつい難しすぎる言葉を引いてしまった際にも、大人がそれを既知のものとして授受するのではなく（それだと大人に聞いた方が早いという理屈になります）、未知と一生懸命に向き合う様子に「共感」することが、何より辞書を引いたことの甲斐となり、次につながります。このように、とりわけ1年生の間はその行動に占める大人の割合が大きいので、「自分で引いてみなさい」とは言いつつも、着かず離れずその時の様子を見てあげることが大切だと思います。

ところがその導入では、単に言葉の意味を確認する作業だけだと、いつの間にか演繹的になってしまいます。また逆に帰納的を目指そうとしても、たとえば「何でもいから10個引きましょう」というやり方は、自由がありそうで実はそうではなく、生徒をふるいにかけてしまう意味で（より機械的に調べられる生徒に軍配が上がってしまい）、うまくいかない例だと思います。

そこで授業ではその中間を取って、「なぞなぞ」として出すことにしています。たとえば、『うっとり』とか『けしからん』というような、何となく耳に入るけれども、はっきりとはまだ意味の定着していない言葉が狙い目です。また『かもしか』や『きかんぼう』のように、別のものを連想しやすい言葉も予想外の記載に触れて面白いです。ただし、うっかり辞書に載っていない言葉を引かせてしまうと厭になることが予測されるので、あらかじめ辞書に載っていることをきちんと確認しておきます。（小学生の辞書には意外と言葉が載っていないことがあります）。

このような「なぞなぞ」形式だと、答は辞書に載っていることでありながら、それを「自分で発見した」という帰納的な体験ができるように思います。この場合、早く引いた生徒には、音読してもらったり、より意味を深く調べてもらうなど、個別な対応で調整ができます。また大人がそれを生徒とのコミュニケーションの一つとして楽しむ素振りを見せれば、全体としても拍車がかかります。

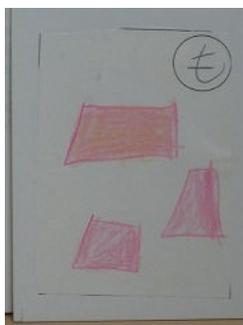
1週間にたった5個という数量的には非合理的な方法ですが、数量化できない好奇心を見守るためにはちょうど良い塩梅ではないかと思います。また、幼少の頃に覚えたての言葉がその日のうちに使われているのを見聞きして驚く経験をするように、言葉に対する感覚が鋭敏な時期には、できるだけ「知っていることが当たり前」と感じられるような演繹的な作業は避け、新しいものを次から次へと発見できる帰納的な方法を試みたいと考えています。

また授業の終わりには、『オズの魔法使い』を少しずつ読んでいます。ダイジェスト版ですが、それでも1年生にとってはかなりの長編で、今十六章あるうちの十四章までを読み終えました。おそらくこの稿がお手元に届く頃にはそれを了読し、新しい作品を選び出している最中でしょう。さて『オズの魔法使い』では、主人公のドロシーがカンザスの家に帰るという大筋のほかに、おなじみの脇役である、カカシ、ブリキ、ライオンが、旅の中でそれぞれ欲していたものをすでに手に入れているというオチがあり、胸のすくような思いがします。私も一度原作を読んだことがあったのですが、すっかり細部を忘れてしまっていたせいか、生徒たちと一緒に読むと、またその印象が大きく変わりました。多くの人に愛されてきたストーリーを生徒たちと共有できる時間を最後まで味わいたいと思います。

(文責 福西亮馬)

秋学期は、春学期から引き続いて絵本の朗読を行うと共に、毎回「ことわざ」や「反対ことば」、「さかさことば」に「回文」、「あやとり」といった様々な「ことば」に取り組んでいます。それぞれ、子供さんにとって親しみのあるものから未知の言葉まで、できるだけ幅広くカバーし、「ことば」の奥深さや面白さに触れてもらっています。ただ、これらの詳細はブログに譲り、ここでは、遂に完成した俳句カルタを紹介していきます。

俳句カルタは、春学期に子供さんの「作りたい！」との声から始まった取り組みです。最初は私も含め、軽い気持ちで取り掛かったのですが、これが意外に難しいものでした。単純に50句近い俳句を作らねばならないこともあります。俳句が増えるにつれ、使用できる頭文字が限定されていくからです。四苦八苦しながらも、春学期の最後には、読み札をようやく完成させることができました。さらに、秋学期の最初のクラスには、子供さんが夏休みの間に描いたきれいな絵札を持って来てくれました。秋学期は、時間を見つけてはそれをカードにする作業を進めています。改めて眺めてみた俳句から、私のお気に入りをお三句、紹介したいと思います。



ももゼリー ふにゆふにゆしてる かわいいな

この句は、ゼリーの揺れる質感を「ふにゆふにゆ」と表しているところがポイントです。「ぷるぷる」という表現はよく耳にしますが、「ふにゆふにゆ」は私にはとても新鮮でした。固定観念にとらわれない表現が出来ているのが、この句の良いところでしょう。



ヌーのむれ つのがたくさん こわいなあ

この俳句には、図鑑で見つけたヌーのページを見開いた時の素直な気持ちが表現されています。そのページには、ヌーが群れを成して移動している写真が載っていたのですが、そのあまりの迫力に「こわい」という気持ちを、つい抱いてしまったのでしょうか。読み札で「こわいなあ」の部分を書き、両側に波線を付して恐怖を表現している点が、その衝撃の強さを物語っているでしょう。それ以外にも、多数のヌーを「つのがたくさん」と表現しなおしているところも、面白いですね。



「つちぶたは アフリカのぶた どんなブタ」

この俳句も、図鑑で見つけた動物を題材にしています。「つちぶた」という親しみのない動物への興味がかきたてられていく様子が上手く表現できている一句でしょう。また、五七五の各末尾を「ぶた」という音で統一しているために、実際に口に出して読むと非常にテンポ良く、つい口ずさみたくなる俳句に仕上がっています。さらに、「アフリカのぶた」と「どんなブタ」のような平仮名と片仮名の配分も面白いと思います。子供さんがなぜそうしたのかを想像してみるのも楽しみ方の一つでしょう。耳でも目でも楽しめるこの句は、実は私の一番のお気に入りでもあります。

まだ紹介し足りませんが、最後に子供さんへ労いの言葉を送りたいと思います。お疲れさまでした。

(文責 岸本廣大)

## 『ことば』 2年生 B(金曜1限) 担当 小林哲也

ことば2年Bの秋学期は、子どもたちから「引き出す」ということをテーマに取り組みをすすめました。前学期は、素読を行ったり、たくさんのお話を読み聞かせたりといった形で、どちらかというと、こちらから色々なものを与えるという側面が強かったのですが、今学期は、むしろ子どもたちの内側にあるものを、作文、考への発表、朗読といった取り組みを通じて見せてもらっています。

作文は、スラスラ書いていく子もいれば、どうしても一言で終わってしまう子もいます。しかし、手が止った子でも、こちらから質問をして話を聞いているうちに、いろいろと書きたいことが湧いてくるということがよくあります。はっきりと言葉にはなっていなかったけれど、漠然と感じていたことを、うまく形に表せるよう引き出すのがこちらの役目でした(こちらから書いてくれたものについて「質問のお手紙」をわたしたりしています)。ただ「書きなさい」という指示だけでは引き出せないものも多いですが、こちらが興味を示して問かけると、いろいろな思い出だったり感情だったりを見せてくれます。「楽しかった」あるいは「嫌だった」という一言で表されることにも、実は色んな感情が確実に潜んでいるのだなと実感させられます。ふいに漏らす一言の重要さに気づかされて、こちらも聞き逃さないように耳をそばだてるようになりました。

今学期は、作文の他にも、漢字プリントやとんちクイズ、素読、読み聞かせ、またいろはかるたを使ってのゲームなど色々な取り組みを行ないました。読みきかせの際には、こちらが読もうと用意した本をKくんが中心となって朗読してくれて、楽しませてくれました。読んだのは「黄色いのはちょうちょ」という仕掛け絵本で、頁中の穴に黄色いチョウチョのようなものが見えるけれども、めくると、オムレツだったり信号だったりするという作りになっています。めくるとどうなるのかを自分でも予想しながら大きな声で読んでくれました(読み方もなかなか上手で、聞くとお家でも朗読しているのだそうです)。自分で読んでみたいという気持ちが、みんなの中に育ってきているということが、なにより嬉しいことです。

また、クラス外の時間ですが、Sちゃんは夏休みに自分の図書館をつくったことを立派な記録にして教えてくれました。自分の部屋に、たくさんの本をお話や図鑑に分類して並べ、それを友だちに貸し出すという図書館をつくったそうです。(詳しくは<http://www.kitashirakawa.jp/yama/log/eid2718.html#sequel>を御覧下さい。素晴らしい取り組みです！)

自分から何かをしていこうという気持ちを応援するべく、今後も様々な「ことば」を引き出していきたいと思います。

(文責 小林哲也)

## 『ことば』 3年生(水曜2限) 担当 上尾真道

秋学期のことば3年の授業は、「書くこと」に重きをおきながら進めています。「書く」と言っても、「詩を書く」から「新聞記事を書く」まで、その目的や要点などは非常に多岐にわたりますが、「ことば」の学習の初期の段階では、まずなによりも「とにかく書くという行為に取り組む」ということが重要でしょう。国語の学習については時折「そんなの普段使っているから簡単だ」とか「どうして勉強する必要があるのか」などということが言われることがあります。確かに、私たちは普段からことばに接していますが、それは主に、話す・聞くという手段によってです。一方で、何かある程度まとまりのあるものを「書く」ことを普段からしている人は少ないのではないのでしょうか。ましてや子供であれば、なおさらです。であるからこそ、「書く」という行為に、まずは身を委ねることが大事なのです。

話すときは違って、ことばを「書く」際には、自分自身から生まれたはずの「ことば」たちが、何かよそよそしいものになって、自分のほうに跳ね返ってきます。書くというのは、ちょっと緊張する行為です。けれどもこの緊張感から逃げずに「書く」訓練を積み重ねてこそ、子供たちと「ことば」との関係はより豊かになるだろうと思います。

具体的な取り組みとしては、実に様々な「書き物」を行っています。詩を書いてももらったときには、中原中也の「サーカス」をまず皆で読んでから、その中に登場する独特な擬音語を味わった後で、そうした音や様子を表すことばを探して詩にしてもらいました。また別の日には、山の上まで出かけて、秋の夕暮れの空気を感じながら俳句を書いてもらいました。詩よりも字数の制限があるという点で、それを難しいと感じる子もいれば、こちらのほうがやりやすいと感じる子もいるようです。また、このような詩的表現ばかりではなく、短編小説を読んだ後で、その感想や解釈を文章で書くという取り組みも行いました。感じたことをそのまま書くのとは違って、頭を使って、論理的に話を進めていく必要があります。このように様々なテーマのもとで「書く」ことに取り組んでもらっています。

(文責 上尾真道)

# 『ことば』 4～6年生(金曜1限) 担当 高木 彬

## 『ある日の教室風景』

わたしが山の学校のカウンターで授業の準備をしていると、「こんにちは」と挨拶しながらAちゃん、そしてHちゃんが玄関から入ってきます。彼女たちはそのまま教室へ。わたしが準備を終えて教室に入ると、Aちゃんは椅子に座って静かに本を読んでいます。Aちゃんは読書家です。読んでいる本は日によってさまざまですが、いま手にしているのは、漢字にルビのふっていない一般的な文庫本です。図書館のバーコードが無いので、自分の本のようなのです。「すごいね！ 漢字読めるの？」とわたしが尋ねると、「うん、だいたい読めるし、読まれへんときは調べる」とAちゃんが言います。「じゃあ、自分の好きな本をどんどん読んでいけるやんな。」「うん、『ハリーポッター』とかすごく好きやし。あ、先生、森絵都さん知ってる？」「うん、知ってる。『カラフル』やろ？」「うん『カラフル』。あれは面白かった。じゃあ山田悠介は？」とAちゃん。

「その人も小説家？」「うん、小説家。」わたしはその小説家について、どこかで名前を聞いたことがある、という程度でした。「いや、読んだことないな。どんな小説を書くの？」「うーん、基本的にはサスペンス、というかホラーかな？ 『アバター』とか『スピン』とか。すごい面白いで。今度貸してあげようか？」「え、いいの？ じゃあ貸してほしい。」「うん、じゃあ、今度もってくるね。」

そう話しているうちに、クラスの開始時間がやって来ます。「はい、それでは始めます。よろしくおねがいします。」「よろしくおねがいします。」いまはクラスの初めに、斉藤洋の『ぼくのおじさん』を、毎週1章ずつ読んでいます。そこから物語の展開を学ぶというのはもちろんのこと、この時間をとることで、自分たちも物語を書くのだという心の準備ができるようです。読み終わるとHちゃんが、自分の書きかけの物語の原稿用紙の束を出して、「『アリエッティ』、また家でも書いてきた！」と言います。「そうか、頑張ってるね！ どこまで書いたの？」「アリエッティが両面テープを手と足に貼って、壁をよじ登ってるところまで。映画では角砂糖を取りに行くときに使うんやけど…」とHちゃんは答えます。そのページを見せてもらいながら、わたしが、「そうか、Hちゃんのアリエッティは、お母さんを助けに行くために使うんやな。アイデアを上手く利用してるね」と言うと、Hちゃんは「うん！」と返事してニコニコしています。「『アリエッティ』、あとちょっとで完成する！ 次はなにを書こうかな？ 『トトロ』の最後で、メイちゃんが見つかった後の話を書いてもいいな。でも、『魔女の宅急便』の続編でもいい。どうしよう？」Hちゃんの頭のなかには、書きたい物語がたくさん詰まっているようです。「そうやな。続編を書くっていうのは、ひとつのアイデアやな。『魔女の宅急便』の続編はどうなるの？ 映画の最後でキキはトンボを助けたけど、そのあと恋人同士になったりするの？」とわたしが尋ねます。「いや、トンボとは友達同士のまま。トンボは飛行船を自分で作るねん。映画では最後、おソノさんに赤ちゃんが生まれそうになってたから、続編ではキキがパン屋の主人になる。」——いますぐにでも物語を書き始められそうです。「なるほど、ちゃんと考えてるな。じゃあ、次の本（白紙の原稿用紙の束）を作っておくね。」そうわたしが言うと、Hちゃんはリメイク版『借りぐらしのアリエッティ』のクライマックス部分を書くのに没頭します。

Aちゃんも、かなりの長編だった前作『Paris Ballet Diary』に次いで、今作『女優になっちゃった!?!』も、持ち前の文章力で黙々と書き進めてくれています。かたわらでは、わたしも自分の物語を書き進めています。ときどき質問があるほかは、鉛筆の音だけが響く時間が過ぎて、あっという間に終わりの時間です。「ありがとうございました。」

次の週、約束どおりAちゃんは山田悠介の『スピン』を貸してくれます。わたしはそれを読んで、さらにその次の週、感想を伝えます。「面白かったよ。とくに最後、東京タワーにみんなが集まるシーンが。」「そうそう！ あそこは…」

(文責 高木 彬)

# 『ことば』 5・6年生(木曜1限) 担当 福西亮馬

## 『漢字の情緒』

今学期は数回に分けて漢字に取り組みました。一言に「漢字」と言っても授業では時間が限られているので、書き取りではなく、その勉強の仕方についてアドバイスとなることをしました。

その着眼点の一つは、複雑な漢字でもほとんどは既に習っているものに分解できる、ということです。これは漢字を覚える際に役立ちます。たとえば「蚕」という漢字は、「天」と「虫」に分けられます。また小学生では習わない（けれども人気のある）「龍」も、左側は「立」「月」で意外と簡単な姿をしており、それ

を知るだけでも臆する必要がずいぶんと減ります。さらに「リ」や「ㄣ」のようなカタカナに似た部品も漢字とみなせば、「夢」＝「艸」＋「目」＋「ㄣ」＋「夕」と見ることができ、その書き順についても「部品同士の順番」に圧縮できれば、ぐっと覚えやすくなります。その調子で興味本位に見ていくだけでも、「職」「警」「激」などのつまづきやすい漢字がきっと今より付き合いやすくなるように思います。

裏を返せば、簡単な漢字ほど侮れないことになります。そしてその組み合わせ次第で、様々な漢字が作り出せるという発見は、漢字に対するより幅広い興味を養うことになります。たとえば「木と日」からでも、「日」の位置をずらすことで、「果」、「東」、そして中学校でも習わない「香<sup>くわい</sup>」が作れます。また一から十までの漢数字を使っても、意外と「仁」のような意味の難しい漢字も作れます。これは六年生でないと習わないと言うと、生徒たちは一同にへえと驚いた顔をしていましたが、これはもちろん、ほんの一例です。

そこで授業では、このような一年生の漢字「だけ」を使って、できる限りそれを習う学年が後になる漢字を作り、バラエティーに注目するということをしました。これには主に二通りの作戦があるようです。一つは一年生の漢字表とにらめっこして、そこから「ありそうな」漢字を作り出すこと。この方針のよいところは、たとえば「朴」のような中学生になってはじめて習う漢字でも偶然に発見できることです。

そしてもう一つは、高学年の表の中に一年生の漢字に分解できるものがないかを探すやり方です。これはとても実際の、六年生の表に「困」が見つかった時には一同に「ラッキー！」という表情が浮かびました。続いて「絶」「唱」「伏」など、枚挙の暇もなく見つかり出すと、生徒たちは一時間が経ってもまだ調べられるという様子で、予想以上に夢中になってくれました。

また次の回には、以上のことを使って自分で漢字を創作することをしました。これはおなじみの取り組みですが、その醍醐味は、あたかもその漢字を作り出した「最初の人」のような気分になれることです。Eちゃんはそこからさらに象形文字にまで遡り、海よりも「少しの水」、(古を示す)腰を曲げた「老人」、そして「月」を描いて、どんな漢字になるかというクイズを発想してくれました。その答をみんなで考え、しかしなかなか当たらないので、Eちゃんにはにんまりとしていました。これこそが『漢字の情緒』と言える出来事ではないでしょうか。

さらに今度は、当て字で読ませる熟語(熟字訓)を考えました。たとえば水筒は普通に「水の筒」と書きますが、実際には水でできた筒ではなく、水を入れるための筒です。これはよくよく考えてみれば不思議なことで、そこには水筒という言葉が最初に作った人の想いや解釈が込められていることに気がきます。日本では飛鳥時代には隋唐の文化が、明治時代には西洋化の波が押し寄せ、それを訓読みに直したり、漢字に置き換えて吸収してきましたが、そのような先人たちと同じように、今の私たちも「第一人者」となって新しい漢字を創作したとしても、歴史的には何らおかしいことではないと思います。そのようなモチベーションで生徒たちが作った漢字を(一部ですが)ご紹介します。

- |        |        |         |
|--------|--------|---------|
| 1)「見面」 | 2)「打書」 | …(Mちゃん) |
| 3)「蚊夜」 | 4)「青願」 | …(Eちゃん) |
| 5)「楽暮」 | 6)「楽機」 | …(H君)   |

ヒント:「打書」は携帯電話と関係があります。「蚊夜」は血が関係する怖い存在です。H君の二つの楽はどちらも「楽しい」ではなく、「楽ができる」という意味で使われています。  
(\*答は最後にあります)

以上のこうした取り組みは、帰納的と言えます。一方、漢字の書き取りは演繹的です。帰納とはすなわち経験的に発見することであり、演繹とはすでに体系化されたものの確認にあたります。どちらかが欠けても駄目で両方大切ですが、しかし放っておくと、あまりにも帰納的なことを試みるチャンスに乏しく、そのバランスは教え(られ)やすい演繹の方にはばかり傾きがちです。そのため、演繹と帰納とは2:8ぐらいに思っておいて、ちょうどバランスが取れるのではないかというのが一つの案であり、ぜひとも中学生になっても自分でどのように工夫すれば勉強を楽しくできるのか、その仕方を学んでほしいと願っています。

(文責 福西亮馬)

\* 熟字訓の答…1) テレビ、2) メール、3) ドラキュラ、4) ドラえもん、5) 金持ち、6) デジタル

## 『ことば』 6年生(火曜2限) 担当 高木 彬

日焼けして一段とたくましくなったH君とM君は、「はい、書いてきました!」と、『ガリバー旅行記』の続編の分厚い原稿用紙の束を渡してくれます。夏休み中に書き上げてくれたのです。私はそれを読ませてもらいます。そこには、スウィフトの『ガリバー旅行記』を深く理解した上で非常に豊かな物語が展開されています。なにより、楽しみながら書いたのだらうなということがひしひしと伝わってくるような、一生懸命な文章です(その内容は「山の学校 weblog」の9月7日付の記事に書かせていただきましたので、是非ご覧下さい)。私はその原稿用紙に講評と添削を書き入れ、それに春学期に取り組んでいた三人分の筆写の原

稿用紙、そして私が書いた続編も併せて、背表紙をつけて装幀し、それぞれにお返しします。そのとき「おおっ！」という小さな声があがったのを憶えています。その分厚い一冊の本は、彼らの昨年来の努力が結晶化した、いわば記念碑なのです。秋学期は、そういう本をめぐる温かい場面から始まりました。

秋学期からの本を読み始める前に、詩作の取り組みをはさみました。これは夏休み前にM君とお約束していたもので、小川が流れる近くの森へ入って自然を感じながら詩を書き、完成した詩を発表してもらいました。「うるさくて、夏の暑さを／もっと感じるけど／だれかのためにいつてるなら／夏の暑さをわすれてしまう」——これはM君の「蟬」という作品です。そしてこちらは、H君の「森の音」という作品——「蟬の音が鳴りひびく／清水流れる小川の音／ここは、森／森はいつでき／いつから音を出したのだろう」。M君の「呼びかけ」と、H君の「哲学的視線」。どちらも森で聴こえる「音」を扱いながら、それぞれの感受性が発揮された、ハッとさせられる詩でした。

さて、朗読、筆写、続編の創作という流れは、昨年の『オズの魔法使い』以来、このクラスにおいてはほぼ完全に定着したと言って良いでしょう。『ガリバー旅行記』の次はなに読むの？ ぼく推理小説がいいな——夏休み前からそう言ってくれていた生徒さんの声に応じて、秋学期からはその名も高い、江戸川乱歩の『怪人二十面相』を読むことにしました。推理小説は、一人で読むのもいいですが、こうして何人かが集まって読むのも、また格別の面白さがあります。みんなで意見を出し合って、推理の議論を重ねていくことができるからです。これぞまさに「少年探偵団」でしょう。朗読と筆写、そして推理を熱心に続けて、いまちようど、小林少年が登場したところです。「ぼく、自分でも借りて読もうかな」とM君が言うと、H君は靴からおもむろに同じシリーズの『黄金豹』を取り出してきました。そうして自発的に読書を進めるきっかけを作れたことが、最も嬉しかったことのひとつです。

授業の後半は、春学期は続編の創作にかかりきりでしたが、秋学期からはまた、隔週交替の「ひみつ道具」作りと漢字の取り組みに復帰しています。以前との大きな変化は、漢字の成り立ちを学ぶ週には、実際に手を動かしてもらうようにしたこと。詳しくはブログの記事をご覧くださいなのですが、要は、漢字は部首の組み合わせでできているので、毎回一部首ずつピックアップし、それが含まれる漢字を書き出すことで、部首ごとの意味やイメージを体得していこうというものです。それは、丸暗記とは逆に、意味を持った形の組み合わせとして、漢字を深いところから理解するきっかけになると思います。

(文責 高木 彬)

## 『かず』

1年、 3年A・B、4年A、4～5年  
(金1) (水1・水2) (火2) (金2)

担当 小林哲也

秋学期のかずクラスでも、前学期に引続き、毎回はじめに計算ドリルやプリントなどでウォーミングアップしたあと、様々なパズルに挑戦してもらっています。1年生では、計算の導入、3年生以上のクラスではパズルへの取り組みに特に重点をおきました。

1年生のクラスでは、今学期は、足し算引き算（特にくりあがり、さがりのあるもの）の練習に重点をおいています。数字を数え上げて答えを出すのではなく、数字を量として把握した上で合算するという考え方になじんでもらうため、タイルを駆使して練習を重ねました。ご家庭での練習もあって、毎回着実に発展する姿がみられたのがこちらとしても嬉しいです。神経衰弱などのゲームの場面でも、強くなったことを実感させてくれました。この調子で今後ものびのびと勉強してほしいと思います。

3年生は、わり算、かけ算（筆算）のドリルを着実にこなす一方で、ナンバープレースをはじめとした様々なパズルに取り組んでいます。特にみんなが熱中したのは「暗号パズル」でした。たとえば次のような二つの暗号があります。

- |   |    |    |    |    |    |    |    |    |    |   |   |   |   |   |   |   |   |    |
|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| ① | ら  | あ  | め  | ん  | と  | ご  | ぼ  | う  | は  | あ | つ | い | し | う | め | え | ぞ | お。 |
| ② | 11 | 00 | 25 | 13 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |   |   |   |   |   |   |   |   |    |

①は偶数の文字だけを読むと、②の方は「あかさたな」の50音表に数字を対応させると解読できます（ふたつとも「あんごうあいうえお」という文が出てきます）。こうした暗号を応用して、宝探しをするというゲームを行ないました。それぞれ解読表をつくって、数字をひらがなに交換する作業を行なったのですが、その姿は真剣さそのもの。遊びのようではありますが、一つの系列を別の系列に変換するという高度な思考操作の訓練にもなります。頭と鉛筆を動かすのが喜びになっていたようなのが嬉しいことです。

4年生以上のクラスでは、ドリルをつかって学校の予習復習を補う一方で、少し難しい論理パズルに挑戦してもらいました。たとえば次のようなものです。

三つの箱（金、銀、銅）があって、その中の一つには王冠が、一つには女王冠が入っており、一つは空です。箱にはそれぞれメッセージが書いてありますが、困った事に一つが嘘メッセージです。嘘をみやぶって女王の冠がどの箱に入っているか当ててください。メッセージは、金の箱：私の中は空ではありません。銀の箱：私の中には女王冠が入っています。銅の箱：金の箱には王冠が入っています。

これは、もし金がウソだとしたら………と言う形で場合分けをしていくと、どれがウソなのかを見破ることができます。場合分けをすればいいと自分で気づく子もいて、なかなかの推理力を見せてくれました。特に中学以降、忍耐強く、筋道をおって論理的に考える力が重要になります。論理的思考が「めんどくさいだけのつまらないもの」では決してないということをいち早く知ってもらえたのではないかと思います。

パズル puzzle の原義には「当惑させる」ということがあります。こうした意味では解法に沿って行なえばすんなりといくとは限らないようなものがパズルの鑑ということになるでしょう。知恵をしばって問題を解くことの楽しさを感じてほしいというのがこちらの願いです。そうした問題が解けたということの喜びと達成感が大きな宝物となってくれることと思います。

（文責 小林哲也）

## 『かず』 2年生(水曜2限)

担当 和田 浩  
福西亮馬

はじめまして。和田浩と申します。秋学期より、福西亮馬先生とともに『かず2年』のクラスを担当させて頂くことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、ここではまず、自己紹介も兼ねて、私が「かず」について考えていることを少し書いてみたいと思います。そしてその上で、『かず2年』の実際のクラス風景を眺めてみます。

子供たちが「かず」を学ぶにあたり、まずは四則演算の法則を理解し、その法則を具体的に適用する力—いわゆる「基礎力」—を養う必要があります。これは、算数や数学を学び続ける上で不可欠な力であると同時に、現実を生きる上でも大いに役立つ力です。そして、この力を養うにあたっては、さしあたり計算ドリルを反復することが定石となります。

こうした基礎力に加えて、「かず」の法則を応用する力や、隠れた「かず」の規則を発掘する力—言い換えれば、「かズのセンス」—を養うことも重要な目標となります。もっとも、「かズのセンス」を養うことに関しては、定石も、秘法の術も、見当たりません。では、どうしたらよいのでしょうか。

「かず」の体系に秘められた美しさや豊かさに触れること。抽象的ではありますが、このような体験を重ねることで、子供たちは「かず」を好きになり、「かず」との戯れを歎び、おのずと「かズのセンス」が醸成されてゆくのだと思います。そして私が強調したいのは、「かず」の美しさや豊かさを感じる心と、青空や夕日や大地や言葉や芸術や人間やあれやこれやから美しさや豊かさを感じる心とは、きっと通底しているに違いないということです。だから、「かズのセンス」を養うことは、子供たちの情操を養うことでもあるのです。

こんなことを頭の片隅に置きつつ、『かず2年』のクラス風景を眺めてみましょう。

まず前半の30分間は、「基礎力」養成を目標とする時間です。子供たちは、計算ドリルを使用して足し算や引き算の練習をし、福西先生と私がその丸付けを行います。計算に成功してドリルの上に大きな花が咲くと、子供たちは満面に笑みを浮かべます。皆ときどきは計算を失敗しちゃうのですが、そんなときは一目散に席に戻り、またたく間に計算をやり直してしまいます。子供たちのこうした様子を見てみると、計算ドリルに取り組むこともまた、子供たちにとって楽しい作業なのかもしれないという気がしてきます。

そして後半の30分間は、「かズのセンス」の養成を目標とする時間です。子供たちは、福西先生と私が準備したパズルに頭をひねります。あるときは、かずつなぎ。あるときは、おなじかたちさがし。またあるときは、落下式五目並べ。どれも一筋縄ではいかないパズルなのですが、子供たちは、こちらが思わず息を飲むくらいの集中力でもって、パズルに取り組んでくれます。予想に反してすいすいとパズルを解いてしまう子もいれば、終了時間がきた後も夢中でパズルに取り組む子もいます。パズルを通じて、きっと子供たちは「かず」の美しさや豊かさの一端を感じてくれている、そう思うと、私の心も踊り出さんばかりです。

こんな風にして、『かず2年』の子供たちは学びます。それにしても、不思議なものですね。冷たい論理を連想させかねない「かず」の学びに、情操の温もりこそがものをいうなんて！

（文責 和田 浩）

## 『かず』 4年生 B(木曜2限)

担当 浅野直樹

秋学期は初回到活動内容について希望を募ったところ、対戦型ゲームに人気が集まりました。せっかく個性もそれぞれである同学年の男の子たちが集まっているのですから、それも悪くはないでしょう。ひよっとすると読者のみなさまの中には、貴重な時間を使ってゲームをすることは何事かと思われる方もいらっしゃるかもしれませんので、こうした活動がいかに重要であるかを以下で書きます。また、テレビゲーム等との付き合い方に頭を悩ませている方も多いかと思います。それについて考える際のヒントになるかもしれません。

結論を先に言いますと、ゲームも要は使いようです。真剣に取り組むなら学校で習う算数や数学よりも頭を使います。また、他のプレイヤーとコミュニケーションを取るという機会も多々あります。

今学期すでに数回行った海戦ゲームではルールの設定に苦労しました。というのも私自身がこのゲームを今までにあまりしたことがなかったので、どうしたらちょうどよい時間で決着するようになるかが感覚的にわからなかったからです。しかしながら、試行錯誤していくうちに、生徒たちのほうから自然と微妙なルール調整の提案がありました。また、別バージョンの海戦ゲームの提案を受け、それも実践しました。どちらの場合もそのルールを熟知している人が勝つ傾向にありました。そのルールをもとに論理的な戦略を立てたからでしょう。

この原稿を書いている時点では、海戦ゲームの次にモノポリーをしているところです。こちらはルールがかなり複雑なので、その説明に時間をかけました。その時も、ルールを知っている人が知らない人に自主的に教えるという形になりました。そしてモノポリーというゲームの大きな特徴はプレイヤー同士が交渉することができるという点です。勝つためには自分のことばかりを考えずに、相手の状況を考えてうまく交渉する必要があります。

冒頭の疑問に戻りましょう。テレビゲームも含めて、どのようなゲームにも論理的思考を養うという側面があるでしょう。反射神経が求められるゲームであっても、本当に上手になりたいと思ったら頭を使うはずで。また、ほかの人といっしょにするゲームであれば、大いにコミュニケーションを取る必要に迫られます。

ただしこれらのゲームには限界があることには気をつけなければなりません。そこで鍛えられるのは論理力などに偏るでしょうし、身体を動かす活動も不足しがちです。やはりバランスは大事でしょう。そして何より大切なのは、どんな活動であっても本気で取り組むことです。受動的にゲームをすることは、受動的に勉強をするのと同じように、あまり身になりません。生徒たちの本気が見られるように、これからも魅力的な活動を探っていきたいです。

(文責 浅野直樹)

## 『かず』 5生(水曜3限)

担当 岸本廣大

春学期は、主にパズルに取り組んできました。秋学期もパズルを解きながら、論理的な思考を着実に鍛えています。さらに今学期は、「狡猾な計算の仕方」を一つの目標に様々な問題に取り組んできました。今回はその取り組みの一部を、紹介しようと思います。

このクラスに通ってくれる子供さんは、算数がとてもよくできます。学校で習った大事な基本をしっかりと理解し、それを自分の力として使いこなしています。しかし、子供さんがこのクラスで問題に取り組む中、私は一つのことを気になりました。それは、計算ミスが見られることです。

何故、計算ミスが見られるのか？さらに、子供さんを観察していると、「正直」に問題を解いていることがわかりました。つまり、式の頭から、式の示す通りに一つずつ計算していくのです。正直なのは、決して悪いことではありませんが、殊、算数(そして数学)に限っては、「狡猾」に解くことも重要です。

例えば、「 $237+257+277$ 」という計算があると、子供さんは「正直」に最初から解いていきます。すると、くり上がりを含む三桁と三桁のたし算が2回必要になるでしょう。しかし、これを「狡猾」に解くと、「 $257\times 3$ 」という形にすることで、3の段のかけ算と一桁と一桁の単純なたし算のみの計算にすることができます。どちらが計算ミスをしにくいのか、一目瞭然でしょう。

このような意図の下、計算ミスを減らせるように、そして狡猾な方法を使いこなせるように、子供さんには上の例のような問題を出題して、「正直」な解き方と「狡猾」な解き方で解き比べてもらいました。実際に、前者の方法では計算ミスをしてしまう一方、後者の方法では、計算ミスがなく、短時間で答えにたどりつくことができたのです。

こうして、「狡猾」な方法の利点を確認した上で、「 $1+2+3+\dots+98+99+100$ 」という発展問題に挑んでもらいました。これは正直に計算しては、たくさんの時間が必要ですし、きっと計算ミスも起こるでしょう。しかし、効率の良い計算方法を使えば、一瞬で、しかも計算ミスの可能性をできるだけ少なくして解くことが出来ます。実際のクラスでどのようにこの問題を解いたかについては、9/8 と 9/15 の「かず 5 年」のブログをご覧ください。

ここに至って、「解き方を考える方が大変だし、「正直」に解いた方が現実には早いのではないか」と思った方もおられるでしょう。確かに、そうになってしまう時もあります。ですが、解き方は一度思いつけば、条件に当てはまる問題全てにあてはめることが出来ます。つまり、単純化や一般化といったことができるのです。そして、そのような「解き方を考えること」こそ「かず」の世界の醍醐味ではないでしょうか。私自身、決して数学が得意ではありませんが、こうした世界には大いに関心をもっています。好き・嫌いは別にしても、子供さんにはこうした世界観を感じてもらいたいと、私は思っています。

(文責 岸本廣大)

## 『かず』 6年生 A(木曜2限) 担当 福西亮馬

『155274263153…』

このクラスでは、学校の進度に合わせた内容と、中学生になるまでにぜひ一度は興味を持ってほしいと思われる数学的な話題（とりわけ論理的思考を要するもの）、そして時折、生徒が今自分の一番興味のあることとして、数学の枠を超えて授業で取り上げてほしいことを、交互にしています。知的好奇心旺盛な生徒とのマンツーマンのため、上の 3 つのどれをその都度選ぶかは融通をつけながら、毎日を非常に楽しんで取り組んでいます。

学校では分数の範囲を終え、今は「割合」「速度」（単位量あたり）をしています。この単元はつまづきやすいので、中学生になって禍根を残さないように、じっくりと基礎を固める必要があります。この時、H 君はいやいやではなく、自分から「～の問題を作ってほしい」とリクエストを出してくれます。その心意気に、私も打てば響けるよう、用意するプリントにはできるだけ手作りを心がけて意欲の継続を図っています。

また私から出す問題では、以下のようなことを考えてもらいました。

1年のうちに13日の金曜日は必ず1回はありますか？ それともないか？

これはみなさんも一度はどこかでお考えになったかもしれません。さてもし該当の日が必ず 1 回はあるとすれば、(縁起が悪いかどうかは別として)少なくとも偶然にやって来るものではないことが分かります。それを実際に論理で一刀両断するところに、考える楽しみがあります。

H 君は当然の反応で、この手の問題に最初、どこから取りかかればよいか悩んでいました。しかし実際に目を動かして該当の日を探していくうちに、ふと 13 日の 1 週前の「6 日」も金曜日であることに気がきました。これは最初当たり前のように思われますが、しかし、なかなか面白い発見でした。というのは、6 日にはもう一つ別の意味である「第一週の」という含みがあります（もう 1 週間遡ると月が変わってしまうことは  $6 < 7$  より明らか）。つまり H 君の考えでは、「第 1 金曜日が 6 日なら、その月には 13 日の金曜日がある」ということになります。こうなれば、かなり具体的です。さっそくこの表現に注目して、カレンダー（携帯電話の機能が便利です）がどうなっているかを実際に調べていきました。

『第 1 金曜日の日付』（1～12 月の順）  
2010 年 1 5 5 2 7 4 2 6 3 1 5 3  
2009 年 2 6 6  
\* 6 の存在が 13 日の金曜日の存在と等価

ここまで調べ上げた時、私は「次の 4 月（の第 1 金曜日）は？」とカレンダーを見る前に質問しました。すると H 君は、「3 日」と答えました。理由は、「前の年（の同じ月）から +1 だけずれているから」と。調べてみると、実際その通りでした。左の表の空欄にはこのあと、3、1、5、3、7、4、2、6、

4（すべて +1。7 は 1 にループ）と続きます。数字の並びに置き換え、+1 するところがだんだん数学らし17 なくなってきました。

けれどもこれは本当にいつまでも成り立つことなのでしょうか？ 数学は「無限」を相手にする学問でもあり、曖昧では駄目です。もし H 君の考えが正しいとすると、すでに 2010 年を調べた時点で 1～7 までのすべての自然数が現れているので、そのどれかが毎年 6 に変化し、命題が肯定的に証明されたこととなります。そこで上の表をさらに続けて実験し、H 君の予想を検証してみました。すると…。

『第1金曜日の日付』(1~12月の順)												
2010年	1	5	5	2	7	4	2	6	3	1	5	3
2009年	2	6	6	3	1	5	3	7	4	2	6	4
2008年	4	1	7	4	2	6	4	1	5	3	7	5
2007年	5	2	2	6	4	1	6	3	7	5	2	7
2006年	6	3	3	7	5	2	7	4	1	6	3	1

\* 6の存在が13日の金曜日の存在と等価

残念なことに、左表の点線の枠がH君の予想に反して+2(+1ではなく)ずれていました。さて、それがなぜ生じるかは、もうお気づきでしょうか？

そうです、閏年です。たった4年に1度(左表では2008年)のことだけで、このように予想外のことが起こるのでした。

しかし、H君は待てよ…と考え直しました。2006年にはまた予想通り+1ずつのずれに戻っているからです。ということは、+1か+2かはさほど問題ないのではないかとも思えます。

つまり、2010年の155274263153の12個の数字の並びには、1~7までのすべてが現れているので、それが+1~+2されても、再び1~7が欠けることなく現れれば、これは過去と未来の無限に繰り返すことができます。すなわちその中に6(13日の金曜日の存在と等価)が必ず含まれることになり、命題が示されたこととなります。

ゆえに新たな考え所は、「+1と+2という操作が混じっても、155274263153の数のバラエティが保たれるかどうか？」となり、これを次の宿題としました。みなさんもぜひお考えになってみて下さい。

(文責 福西亮馬)

## 『かず』 6年生 B(金曜2限) 担当 高木 彬

### 『あたりまえのこと』

秋学期は、生徒さんが夏休みに自宅で進めてくれたドリルの答え合わせから始まりました。当然のことですが、学年別のドリルには、その学年で学ぶ単元が網羅されています。だから、丸つけをしていると、生徒さんそれぞれの得意/不得意が、おのずと浮き彫りになります。つねづね私が偉いなど感心させられるのは、丸つけを終えて生徒さんにドリルをお返しすると、こちらがなにも言わずともすぐさま間違い直しに取りかかってくれることです。より正確に言えば、すぐに間違い直しをするから偉いというよりは、そういう自分の不得意から逃げずに真摯に取り組む姿勢が偉いと思うのです。

どの生徒さんも、間違いのほとんどはイメージミスで、ときには私がドリルに赤ペンで書きこんだコメントをヒントにしながらか、ミスに自分で気づいて黙々と直してくれます。——「あ！なんでこんなことしてるの(笑)」などとつぶやきながら。しかしもちろん、それでも分からないところはあるものです。問題を解く手が止まって考えこんでいる様子を見て、私が声をかけることもあります。たいていは生徒さんから「先生、この問題が分かりません」と自発的に質問してくれます。「ここはこういうふうに考えればいい」と私がお教えすると、「あ、そうか！」と言って問題を解いて、「じゃあ次の問題はこうやんな？」と類似の問題も解いてみせて、本当に分かっているのかどうかを自分で確認する姿勢がみられます。今回答え合わせをしたドリルのうち、Mちゃんの取り組んでくれたものについて言えば、大きな桁の繰り下がりが、M君とAちゃんのものについて言えば、前半の計算問題よりも、後半の割合や和差算の文章問題が、ひとつのポイントになっているようでした。その問題をきちんと納得して解くことができるまで、ときには何十分もかけて対話することもありました。

山の学校のクラスの良いところは、こうして生徒さんと密にやりとりを交わしながら、着実に学びを進めて行けることです。それは、生徒さんが先生の説明を受け身の姿勢で聞いただけで安易に「分かったつもり」になるのではなく、自分自身が乗り越えていくべき問題として分からないところを自覚し、それに自発的・積極的に向き合っていく姿勢を守り育てていくことに寄与しているのだと思います。

今回はドリルの取り組みにしぼってお伝えいたしましたが、このクラスではほかにも、折り紙を使った幾何学実習や、マッチ棒などのパズルにも取り組んでいます。詳しくは前号の『山びこ通信』の拙稿や、山の学校Weblogの記事をご覧くださいなのですが、これらは、実際に算数の問題を解いていく以前の根本的な下地を固めるための取り組みです。

さてここまで書いてきて、以上のようなことは、もしかしたら至極あたりまえのことなのかもしれない、とも思えてきています。しかしながら、こうも思います。その「あたりまえ」を「あたりまえ」のようにこなすことは、じつは想像するよりも難しいことなのではないだろうか、と。私は、「あたりまえ」のことに「あたりまえ」に一生懸命に取り組めるこのクラスの生徒さんたちに、最大限の敬意を払いたいです。

(文責 高木 彬)

## 『中学・日本語の読み書き』（火曜3限） 担当 高木 彬

その上縁は鋸歯状<sup>きよし</sup>をなして、おそらく鋭利な工具によって切断されたものに違いない。その下縁は今、向う側に折れ曲った状態で私の視線の届かぬ所にあるけれど、その形態が上縁同様である事はほぼ確実に想像できる。左右の縁は上下の縁と直角の直線に切断されていて、こう記述した事により私はそのものの形状を、大きさや質感以外の面から明白にしたと言える。（中略）／もちろん今在る位置から取り上げて測定すれば、もっと精密な表現が許されようが、そのものは私にとって不可触である。言語によってそのものを記述する行為に、或るささやかな聖性を与えたいと望んでいて、私は一種の禁欲を自らに課さざるを得ないと感じている。／さて、限定された視覚のみによる判断では、それは銀色に輝く極く薄い物質である。過去の経験に照らして、それは見かけ上、或る種の紙であると結論する事ができよう。表面は平滑ではなく、いわゆる梨地状<sup>なしぢ</sup>をしていて、そこにはHARISという文字群による一種の地紋が認められる。／そのものの固有の名前を私はもとより熟知している。その名をあえてここに記さぬのは韜晦<sup>とうかい</sup>からではない。それこそが一篇の主題であるからに他ならない。

—— 谷川俊太郎「そのものの名を呼ばぬ事に関する記述」（『定義』、思潮社、1975年、所収）

『ロミオとジュリエット』の第2幕第2場、有名なバルコニーのシーンは、ジュリエットが「名前ってなに？」と問いかけて、物語的頂点のひとつを迎えます。「バラと呼んでいる花を 別の名前にしてみても美しい香りはそのまま」。

そこにある一輪のバラは、「バラ」である前に、ほかのなにも違う色と、なにも違う形と、なにも違う質感と、なにも違う香りとの微妙な均衡点に咲いた、ただそこにある唯一の存在です。それをてっとり早く表現するには「バラ」という名前を使えばいい。でも名前の便利さに頼りきりになってしまうと、そこからだんだんとその絶妙な唯一性がこぼれ落ちて、あとには定型的なイメージだけが残されていくこととなります。もちろん「バラ」は「ツバキ」とは別の花。でも、「このバラ」と「あのバラ」とでさえ、実はぜんぜん違う花なのです。わたしとあなたが違うように。

ほかのなにもものでもないこの花の美しい香りを、どうすればあなたに伝えられましょうか。そのことに真摯に向き合うとき、人は、あらゆる細部をも見逃すまいと全感覚を研ぎ澄まし、あらゆる言葉を尽くそうとします。するとそこには、「バラの香り」と言って済ませるよりもはるかに豊かな芳香が立ち上がることでしょう。そしてそれは、だんだん現実の香りに似てくる。表現によって、存在が生まれる刹那の「或るささやかな聖性」に触れるのです。ウィリアム・シェイクスピアもまた、ジュリエットがジュリエットであることを表現しようとして、長い戯曲を書き連ねたものでした。

秋学期の前半は、夏休みの思い出について「どこそこに行って楽しかったです」と書く前に、そのうちのワンシーンに目を凝らし、言葉だけでそれをどこまで描写・再現できるかに挑戦してもらいました。この「表現力の特訓」の意義について今回は書かせていただきましたが、その様子と成果については、ぜひ山の学校Weblogの記事をご覧ください。後半からは松岡正剛の文化論『花鳥風月の科学』を読んでいます。

（文責 高木 彬）

## 『英語の基本』 中1年生（火曜4限） 担当 岸本廣大

最近、クラスで疑問文や複数形といった文法に取り組むことが多くなっています。春学期の初め、アルファベットを一生懸命覚えていたのが半年前とは思えない進歩具合です。反面、苦手な点もだんだんと明らかになってきました。特に、生徒さんに共通しているのは、単語の記憶です。春学期から続けている「単語の確認」では、生徒さん全員が間違えた単語を次回も確認するというシステムがあります。その中に春学期から継続して残っている単語があることには、やはり対策が必要でしょう。秋学期は「単語記憶帳」も導入し、その対策に力を入れています。ここでも、私なりに単語の記憶法をまとめてみようと思います。

一口に単語と言っても、覚える要素は発音・つづり・意味の3つがあります。それらを別々に覚えるので

はなく、三位一体のものとして認識することが重要です。その上で、注目して欲しいのは、「つづりと発音の関係」と「つづり(or 発音)と意味の関係」です。まず、前者の關係に着目した記憶法は以下の方法です。

①：発音を中心に覚え、つづりは発音を参考にする

②：つづりを中心に覚え、発音はつづりを参考にする

①は、耳と口で覚えるがゆえに、時と場所を選ばず、手間もかかりません。しかし、発音からつづりが容易に推測できない単語も少なくないのが難点です。他方、②は覚えるのに目と手が必要なため、時と場所が限られ、時間がかかるのも短所ですが、一定の規則に従えば、つづりから発音を推測することは①よりも容易です。

①と②は一長一短ですが、上手く使い分けることで、欠点を補い合えます。例えば、“daughter”は、つづりと発音に乖離があるため、①よりも②の方がより有効な記憶法でしょう。逆に、“stop”という単語はつづりが発音と一致するため、①の記憶法で十分です。これによって、「つづりと発音」は効率的に覚えることが可能です。

続いて、後者の關係に着目した記憶法です。

I：単語と意味を暗唱して覚える

II：何かと関連付けて覚える

III：文脈の中で覚える

I は一番オーソドックスですが、時間の経過と共に抜け落ちていく確率も一番です。II も有効で、例えば“catch”を「キャッチボール」と結びつけることで、「捕る」という意味を覚えることが容易になります。ただ、必ずしも覚えやすい関連付けが出来るとは限りません。III は、単語のみではなく、英文の意味ごと覚えようとする方法です。例として、“I usually get up at six.”「私はたいてい6時に起きる」を覚えることで、“usually”が「たいてい」という意味を持つことを思い出せます。文全体の記憶は大変ですが、逆に考えれば、多くの単語を一度に覚えることができるのです。これらも、それぞれの単語に適切な方法を使い分けることで、効率的に単語を覚えていけるはずですが。

以上、単語の記憶法をまとめてみました。最後に一つ言いたいことは、上記の方法は、いずれも覚えようという気持ちと実践する実行力を前提としています。やり方を知っても、実践が伴わなければ意味はありません。もしこれを参考にしようとして読んでくれる中学生がいらっしゃれば、このことだけは忘れないで下さい。

(文責 岸本廣大)

## 『英語の基本』 中2年生 (水曜3限) 担当 浅野直樹

中学2年生の学年も半分を過ぎました。英語に関しても不定詞や助動詞を習い、本格的な英語になってきました。これくらいの時期になると英語の得意／不得意、好き／嫌いがはっきり分かれてきがちです。このクラスの生徒たちには前者のままでいてもらいたいです。少なくとも「好き」であってほしいです。苦手な項目があつてたまに「不得意」だと思つてあつても、「好き」で英語の学習を続けていけば、きっと「得意」になる時が訪れます。それは中学3年生の時かもしれませんし、高校生の時かもしれません。あるいは大人になってからのこともあるでしょう。英語は好きで続けていけば、少しずつではあつても必ず向上するものです。

というわけで、このクラスでは英語を好きでいてもらうことを最大の目標にしています。その目標のために逆に英語が嫌いになるきっかけを考えると、わからないことや、特にわからないことを非難されることが挙げられると思つています。不思議なもので、一度わかれば何ということもない事項でも、わからない時はわからないものです。幸い私は英語がわからなかつた時の記憶が強く、最近でも新しい言語を習つて苦労したという経験をしているので、その時の気持ちを感覚的に理解しているつもりです。ですので、私は「なぜわからないのか」と叱責することはしません。それによくよく聞いてみると、生徒のわからないということも合理的で、日本語と英語の違いを反映していたりするものです。

他方で当然のことながら、各種の文法事項などを理解してもらるように日々努力しています。先に英語を習つた者としてうまく道案内できればと思つております。中学2年生の時期ですと、まず時制や疑問文とその応答など、英語の骨格を確実に理解することです。be動詞と一般動詞の違いはいくら強調してもしすぎることはありません。次に助動詞や不定詞といった重要事項の理解が求められます。その他として、名詞の複数形やitの使い方など、細かなルールがあります。英語にはこうした細かなルールがあるので、いくら努力しても英語が完璧にわかるということはまずあり得ません。そのことは英語を書いてみるとすぐわかります。

そこで英語を嫌いにならないために重要となるのが、多少わからないことがあっても受容できる心構えです。英文を読んでいてわからない箇所があっても、文法や文脈を総合して考えれば、ある程度は推測することができます。これらのことを念頭に置いた練習として、このクラスではネイティブ向けの題材を音読してもらい、いくつか英語で質問するという活動をしています。この活動をもう 10 回以上したので、かなり慣れてきました。ついでに英語文化圏の雰囲気をつかんでもらえると幸いです。

(文責 浅野直樹)

## 『英語の基本』 高校生 (月曜 4 限) 担当 百木 漠

この授業は N くんとのマンツーマン授業です。春学期の中間テストでは、文法問題はそこそこできたものの、教科書の長文問題がボロボロだった、という結果を受けて、秋学期は文法に加えて長文読解にも力を入れています。

長文読解は、いちど学校の授業で扱った長文をもう一度読み直して、日本語訳や文法の確認をしています。まず一文ずつ英語を発音して読んでもらい、日本語の意味を言ってもらいます。いちど授業で習っているはずですが、時間がたって忘れていたり、意味を十分に理解できていない箇所がぼろぼろと見つかるので、そのたびごとに僕が解説を入れていきます。最後にもう一度、英語だけで全文を発音しながら読んでもらい、時間があれば確認問題を解いて終了です。日本語の意味を確認することももちろん大切なのですが、それと同じくらいに実際に全文を英語で発音しながら読んでもらう、ということを重要視しています。何度も繰り返し発音して読むうちに、特に意識せずとも文章の内容が理解できるようになればしめたものです。そのレベルに達するまで何度も繰り返し、声に出して読み直す、というのが重要なところです。

その結果、先日行われた 9 月末の前期末テストでは、中間テストよりも点数が 15 点ほど伸びたそうです。できればあと数点とって大台に乗せてあげたかったという気持ちもありましたが、文法と長文の両方を勉強した結果、確実に点数と実力を伸ばせたようなので一安心しました。この結果が N くん自信にもつながってくれるといいなと思います。

4 月に教え始めたときに比べて、N くんは英語の力は確実に伸びています。春学期に山下太郎先生が行ってくださった中学レベルの英作文特訓の効果も大きいと思います。最近はやや難しめの英文でも意味を理解できるようになってきました。しかし現在の N くんにはひとつ大きな弱点があります。それは単語力です。N くんは高校レベルの難しい単語は意外によく知っているのですが、そのいっぽうで中学レベルの基本的な単語が抜けていることが多く、テストでも勿体ないところで失点してしまうことが多いようです。語彙力は語学を学ぶ際の一番の基礎なので、いっそうの実力アップを図るためには、中学レベルの基本単語の復習が不可欠だと考えています。そこで、先日 N くんには高校入試用の単語帳を一冊購入してもらいました。今後は、その単語帳に収録されている基礎単語を元に、毎週簡単な単語テストを行なっていくつもりです。

単語力、文法力、長文読解力の三つの力をバランスよく伸ばしていくことで、N くんさらなる英語力アップを実現していければと考えています。

(文責 百木 漠)

## 『英語の基本』 高2年生 (木曜 3 限) 担当 浅野直樹

山の学校では高校生を中心とした有志で今年の 1 月から『ハリー・ポッター』の原著の読書会を行っています。およそ 2 週間に 1 回のペースで、これまでのところ 18 回まで続けてきました。このクラスの生徒にも参加してもらっています。各回の記録はブログのほうをご参照ください。以下ではその感想を述べます。

一言で感想を言うなら「おもしろい」です。それは題材の持つ力によるところが大きいでしょう。私はこの取り組みで初めて『ハリー・ポッター』に触れたのですが、その魅力に引き込まれつつあります。現代のイギリスを舞台にしつつ魔法使いの世界が描かれているというバランスが絶妙です。ハリー・ポッターを始めとする魔法学校の生徒は現代っ子ですし、大人たちも当世風です。魔法が使えるといっても学校で魔法やその周辺事項の勉強をしなければなりませんし、魔法学校の先生たちもいろいろな人がいます。これまでに読んだ内容から判断すると、人間界と魔法界にはある種の対立があるようですが、どちらもどっちだという印象を受けません。両者を見ることによって、時代や文化を超えた人間の普遍的なあり方を探ることができそうです。

というわけで、日本語で読んでも得るところは大きいのですが、やはり原著を読むと受ける印象も異なり

ます。翻訳では読みやすさを重視して直訳から離れてしまうことがよくあります。それは仕方のないこととはいえ、原著を読むとまた違った印象を受けます。直訳に近い箇所でも、代名詞が何を指すかなどをめぐって複数の解釈が成り立つことも少なくありません。翻訳をするためには解釈を一つに絞らなければなりません。英語のまま読むと複数の解釈を含んだまま受け取ることができます。例えば、英語の"as"はぱっと思いつくだけでも「～の時、～だから、～のように、～につれて」という意味があります。状況によってはその中から1つだけを選ぶのは非常に困難です。また、英語で読むとどうしても時間がかかるので、日本語だとさっと読み飛ばしてしまうような細部まで味わうことができるという副産物もあります。

さらに、時々聞きなれないお菓子の名前が出てきたりするのも楽しいです。今ではインターネットが発達しているので、気になってもすぐに調べることができ、画像も見られることが多いです。食事についても、魔法学校の新生歓迎の晩餐会で肉料理ばかりだったのがある意味印象的でした。そうしたところから文化の違いを感じることもできます。

最後に英語学習に関する話もしておきましょう。普通の高校ではめったに触れることのない、長くてまとまりのある文章に触れるという点が最大の意義でしょう。文脈の力も使いながら、ある程度の速度で英語を読むという経験が積めます。また、分詞構文や時制などの文法事項も実地で学ぶことができます。そしてわからないところがあっても他の人に聞くことができるということが読書会の大きな利点です。

(文責 浅野直樹)

## 『英語の基本』 高3年生 (水曜3限) 担当 上尾真道

高校英語では、受験を控える生徒さんとともに、基礎文法・語彙・長文の三点を重視しつつ受験対策を行っています。基礎文法としては、特に「時制」「態」「助動詞」に焦点を当てた簡単な英作文の取り組みを行っています。これらは、全て英語の文の根幹に関わる場所となっています。過去、現在完了、過去完了、受動態、進行形、未来、可能、義務など、文章の成立に深く関わっている文法事項について復習し確認しておくことで、様々な細かい文法的要素を応用的に使用するための土台を作ることが目的です。また語彙については、宿題として単語表を渡し、それを使った文章問題を解くということを行っています。英語の単語は、一回見るだけではなかなか覚えることはできません。実際に思い出したり、間違えたり、それから訂正したりなどして、単語同士のネットワークを作っていく必要があります。

さて受験を控えた勉強ということについて一言付け加えておくと、どの教科にも言えることなのですが、学習の最中にこそ集中する癖をつけることが重要である、ということです。ドリルや、問題集などは、やり馴れてくるとついつい、手先で答えを書いてしまうものです。確かに手がひとりで動くという状態は、問題をやり込んだ証という意味では、誇るべきものですが、ただし、それは試験本番においてに限りません。勉強をしている段階では、気迫を込めて問題に体当たりするからこそ、「間違い」の重みを受け止めることができ、それを「正解」へと変えていくことができます。受験勉強の期間というのは、もちろん学習内容を吸収することも大事ですが、こうした集中力の鍛錬の時期としての重みもあるでしょう。

(文責 上尾真道)

## 『数の基本』 中学生 (水曜4限) 担当 浅野直樹

秋学期からは数学を通して黙って自己と向き合う時間を作ることにしました。授業の冒頭にそれぞれ一枚の計算ドリルを用意し、全問正解を目指して緊張感をもって取り組んでもらっています。

前回の『山びこ通信』でもお伝えしましたように、このクラスでは和やかな雰囲気の中で数学を楽しんできました。頭を使うような応用問題を用意してくると喜んで挑戦してくれ(喜んで数学の問題を解こうとしてくれるのはうれしいことです)、時にはその内容を巡って議論になったりもしました。これは本質的に大事なことです。しかし、これほど数学に親しんでいる割には学校のテストの点数が伸びないという共通の悩みを抱えていました。数学の本質をつかんでいればテストの点数に一喜一憂する必要はありませんが、生徒たち自身が悩んでいたのが解決の道を探るべきでしょう。答案を見ながら詳しく検討すると、勘違いや計算ミスなどが非常に多いことがわかりました。それらがなければほぼ満点だということも珍しくなかったのです。

というわけで、上記の計算ドリルを始めました。始めてみるとこれがなかなか効果的なようです。用紙を

配ると一瞬で教室の中が静まり返りました。そしてめいめい集中した様子で問題を解き、提出する前には見直しもして、答え合わせをして一問間違っていたりすると大いに悔しがるという光景が見られます。また、純粋にわからないという問題に出くわすこともありました。その場合もいろいろな角度から考えて正解を導き出せたこともあれば、混乱したまま正解できなかったこともありました。わからない問題があっても、いかに間違いを最小限に抑えるかということが一つの見所です。わからないことに焦って普通なら解ける問題を間違えてしまうといった事態は避けたいです。わからなかった問題の間違い直しは答え合わせの後で必ずしてもらっているの、一回り上の実力がついたことでしょう。何となくできそうだけれども怪しいという、計算ミスと不理解の中間的な場合もありました。

こうした取り組みを通じて、自己と向き合うということを実践してもらいたいです。数学ではどこまで理解できて、どこから理解できないかを自分で把握できると半分以上わかったようなものです。他の科目でも自分の進み具合や弱点を把握している人はそれに沿って対策をすれば必ずできるようになります。現状を把握せずに闇雲に努力してみても、得るところが少なく嫌になってしまうことが多いです。

冷静に自分の状況をつかもうとすることの重要性は、何も学科学科科目だけに限りません。実生活においてこそ真価を発揮します。人生の逆境においても冷静に判断するということは、数学でわからない問題があってもできることから確実に解いていくという姿勢と似ています。中学生にもなるいろいろなことがあるでしょうが、数学で培った思考力で人生を切り開いていくことを期待しています。

(文責 浅野直樹)

## 『数の基本』 高校生 (木曜4限) 担当 浅野直樹

今回は受験について書きます。

数学は解けているか解けていないかがはっきりするので、入試で点数の差がつきやすい科目です。国語や英語のように解釈でもめることもまずありません。できたかできていないか自分でだいたいわかります。そういう意味ではやりやすい科目でもあり、シビアな科目でもあります。

入試では問題が解ける必要があります。特にセンター試験のようなマーク式の試験では最後の答えが合っているか間違っているかのどちらかしありません。この仕組みには数学的思考を見て部分点を与えることができないという大きな欠点がありますが、完全に解けた場合はどちらも同じです。

問題を解くためには問題文を見て何が問われているかを把握しなければなりません。大学入試レベルでは単なる計算のような問題はほとんど出題されません。与えられた設問から、解くことのできる問題へと変換する作業が求められます。そして方針が立てばあとは実際に手を動かして解くのみです。そこでは正確な計算力が不可欠です。その際にはいろいろな公式や計算のショートカットのテクニックを使うことができますが、それらはあくまでもおまけです。基本ができていればたいてい何とかできますし、むしろ基本から遡って考えると応用がききます。個人的には二次方程式の解の公式、三角比の余弦定理、三角関数の加法定理など、ごく少数の公式だけを覚えていれば十分だと思います(これらの公式も証明できると理想的です)。

入試までに到達すべき理想像がはっきりしてきたところで、そこへいたる道筋を考えましょう。ベクトル、確率、三角関数といった各分野にどのような内容があり、それがどういう意味なのかということをもっと知っておくのが前提条件です。これは学校で習う時にしっかりとついていけばクリアできます。もしも何が何だかさっぱりわからないという分野があれば、どこかで時間を見つけて集中的に取り組むべきです。次に、実際に手を動かす練習を積むことです。計算やベクトルの操作、三角関数のよく使う角度を求める作業、微分・積分などは何も考えずにできるくらいになるとよいです。これも学校で習い進めている時に同時並行で進められると理想的です。

ここまでの段階をクリアできても、まだ入試や模試では問題を解くことがあまりできないと思います。ここからは、時には分野横断的に、設問から解くことのできる問題へと変換する能力が問われます。その能力をつけるには、ある程度まとまった分量を学習してから、もう一度復習をするのが効果的です。例えば複素数を習ってから二次方程式や二次関数の復習をするときっと理解が深まるはずですが、時期で言うと、高校3年生の夏休みの終わりまでにその復習を終えたいところです。私自身も高2と高3の夏休みに大きく復習をして、それまでは目の前の作業に何とかついていこうとしていたのが、大局を見通せるようになりました。それ以降は過去問などを活用しながらひたすら問題を解くことです。おそらく解くことができる場合もあればできない場合もあると思います。それでも解説を読めばたいてい理解できるでしょう。

今年大学受験をする人は残り時間もわずかです。悔いのないように力を尽くせることを願っております。

(文責 浅野直樹)

## 『物理・化学』 高3年生（水3・4限） 担当 上尾真道

高校の物理・化学の授業では、受験を控えた生徒さんとともに、基礎の復習を主に行っています。大学受験では、最近では理系でも、物理・化学の両方を必ず受験しなければならないというところは減ってきているようですので、生徒さんの希望を聞いたうえで、秋学期の授業では、主に受験で使用する「化学」に集中的に取り組むようにしています。目下、参考書を使用しながら、化学Iの範囲の最初から基礎事項をひとつ、ひとつ確認しています。

化学の問題は、主に、理論的なことについて聞かれるもの、実験のプロセスに関わるもの、そしてデータの計算に関わるものがあるでしょう。理論や実験プロセスのレベルでは、とにかく覚えていくというスタイルでの学習を進めていくほかありません。計算については、特に大学入試レベルの化学の問題では、いつでも使える考え方のコツがありますので、それを押さえておくとグッと楽に式が立てられるようになります。それは、化学の計算問題は、ほぼいつでも、理想の値と、実際の値との間の比について考えて解く、ということです。化学には、まず理想の状態が  $1\text{mol}$  という単位とともに定義されています。例えばある分子  $1\text{mol}$  の質量は、 $16\text{g}$  といった具合にです。この分子量：質量 $=1:16$  という比は常に変わりません。ですので実際の質量が  $8\text{g}$  であった場合には、 $1:16=x:8$  という式がすぐに立てられます。問題集の解説などでは、この辺りを飛ばして最初から当たり前のように  $x=\dots$  として計算式が立てられています。ですが、そもそもそれは理想と現実の間の比という考え方に基づいているんだということを覚えておけば、少し問題が複雑になった場合にも、落ち着いて対応ができるかと思えます。

(文責 上尾真道)

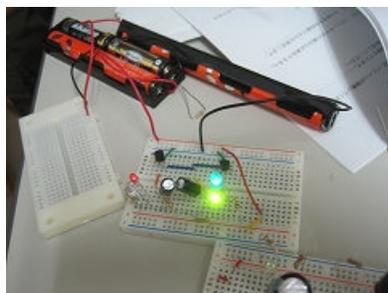
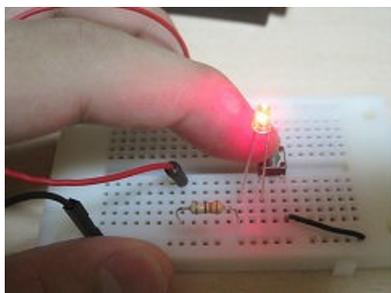
## 『ロボット工作』 中学生（金3限／隔週） 担当 福西亮馬

### 『試行錯誤のすゝめ』



今学期は電子回路とセンサーについて勉強しています。前学期にしたロボットの動作原理（機構は来学期）と組み合わせることで、ロボットは、単に動くだけでなく、「見る」「触る」などの感覚を持つことができます。ロボットでいう感覚とはすなわち入力のことです。それがあつかないかをプログラムで条件分岐して出力することで、ロボットに様々な局面に応じ、自律的に運動させることができます。

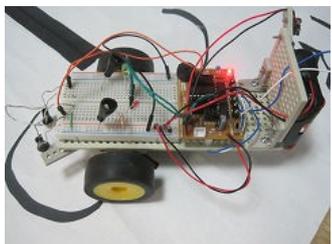
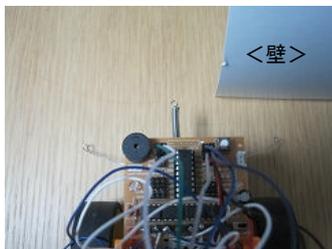
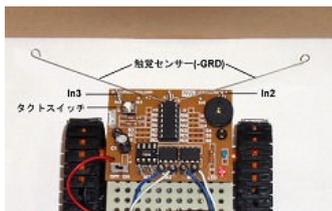
最初の授業では、センサーの基本として、電子回路を少し見てきました。回路図と実物の写真を見ながらブレッドボードの上に各部品を置き、配線



していくことをしています。トランジスタとコンデンサを利用して、二つのLEDが互いに明滅する回路を作ったのですが、ここで生徒たちは自ずとコンデンサの容量を変えたり、LEDのつなぎ方を変えたりして実験してくれていました。（特にコンデンサの容量が大きいと、そこに溜まる電気も大きく時間がかかるため、明滅がゆっくりになります）。

こうした電子回路の楽しみの一つは、それぞれの部品が単純な個性を持ち、誰がやっても同じようにできるという再現性があることです。生徒たちは思わず「楽しい」を何度も口にしていました。それでも実際には試行錯誤があり、うんともすんともいえないことはよくあります。それは自分の頭の中ではちゃんと回路がつながっているつもりでも、実際にはあちこちに空想が入り込んでいるからです。（これはプログラミングでも同じです）。回路やプログラムは、こちらが正しく作ればその通りに動き、そして間違えばその通りに間違っただけ動きます。このようなハードウェアによる仕様変更の難しさ、工夫の楽しさを最初に体験してから、次にソフトウェア（プログラム）でも同じことが再現できることを確認すると、より理解が多層的になるものと考えています。

また今はボタンを押すと LED がチカチカ光るだけですが、その回路を組めることは、ロボット工作ではすぐに応用に結びつく重要な基礎です。というのは、このスイッチをセンサーに、LED をタイヤやアームに置き換えれば、すぐにロボットに変身するからです。



さてセンサーは、ロボットの基板（頭脳）につながります。センサーは、ロボットではスイッチと同じ働きをします。つまりスイッチのオン・オフを判定し、それを左右のタイヤを動かすといった行動に変えます。その意味ではロボットと言っても部屋の明かりが点いたり消えたりする仕組みと何ら変わりません。そしてこのスイッチに、場合に応じて光センサー（明暗）を使ったり、触覚センサー（ボタン）を使ったりします。

たとえば左図のロボットで、触角が右側にある壁に触れれば、その壁をよけるためにどのように動けばよいでしょうか。時計回りの旋回でしょうか？ それとも反時計回りでしょうか？あるいは一度後退させてから…？と、このように状況に応じ望みの動作を達成するにはどうしたらいいかを考えることがロボット工作の実に醍醐味です。



以上のことを踏まえた後、今学期はラインレースに挑戦しようと考えています。これはマジックで引いた線を認識してうまくロボットにたどらせる問題です。

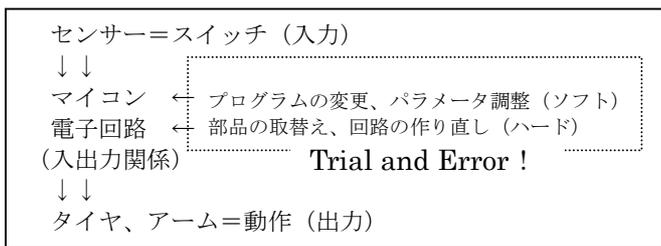
そこで使うセンサーには一番簡単な CdS セルという光抵抗を考えています。これは床の明暗に対応して変化する（光抵抗を通る）電流の差で、ラインをはみ出たかどうかを認識するものです。

最初は、Cdsセルの位置調整で試行錯誤して取り組んでもらうこととなりますが、次学期には実際に電流の値を「計測」し、より解析的に動かすことを想定しています。

そして、それがクリアできれば、いよいよ内輪でのロボット同士のミニゲームを実現したいと考えています。

（文責 福西亮馬）

『ロボットの入出力関係』



## 『ユークリッド幾何』 中学生（金3限／隔週） 担当 福西亮馬

### 『コロンブスの卵』

ある荒野の1本道を、あなたは車に乗って飛ばしていた（ただしこの車はどんなに工夫しても、最大2人乗りしかできない）。ふとさびれたバス停が見え、あなたはヒッチハイクのサインを見て、車を止めた。そこには3人の人影があった。1人はかつてあなたを事故から救ってくれた命の恩人、もう1人はあなたが日ごろから結婚したいと望んでいる理想の女性、そして3人目はもうかなり高齢の老婆だった。あいにくバスは1日1本しか来ず、それも時刻表によれば6時間後とあった（そして実際6時間後にやって来た）。もしあきらめて歩くにしても、最寄の町まで20km以上離れており、ゆうに4時間はかかってしまうだろう。そこであなたは思案した。

さてこのような状況で、実は全員がハッピーになれる方法がある。あなたはそれを思いつけるだろうか。

これは、授業の合間に紹介した、とある映画の中に出てきた、なぞなぞ（推理クイズ）です。答が分かっただけで何のことはない「コロンブスの卵」なのですが、しかし世の中に出れば往々にして、重要な局面ほどこうした「コロンブスの卵」と言える問題が待ち受けているものではないでしょうか。仮にそうであるなら、その種の問題に時間を費やしたとしても、決して無駄にはならないでしょうし、むしろ新しい価値を生み出すためのトレーニングになっていると私は考えます。

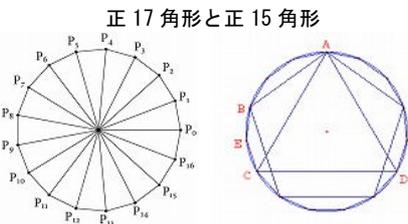
ところで、これは生徒から聞いた話ですが、学校のある数学のテストは、50問を25分で解くそうです。おそらく計算問題がメインの場合だと思えますが、それにしても1問30秒とは驚きです。それに対し、こ

のクラスで、ユークリッド『原論』から取り出して考えている問題は、1問につき10時間のスパンを想定しています。なぜなら古代ギリシア人が来る日も来る日も砂の上に図形を描いていたことと照らし合わせれば、むしろ短いとさえ思われるからです。この時間感覚の差は、一体何を意味するのでしょうか。

そうです。「演繹」と「帰納」との違いです。これについては、数学者の高木貞治の著した『近世数学史談』から、特に日本の若者に向けられたメッセージとして、言葉を借りたいと思います。

ガウスが進んだ道は即ち数学の進む道である。その道は帰納的である。… (中略) …数学は演繹的であるというが、それは既成数学の修行にのみ通用するのである。自然科学に於いても一つの学説ができてしまえば、その学説に基いて演繹をする。しかし論理は当たり前のだから、演繹のみから新しい物は何も出てこないのが当たり前であろう。もしも学問が演繹のみにたよるならば、その学問は小さな輪の上を永遠に周期的に輪転する外はないであろう。我々は空虚なる一般論に促されないで、帰納の一途に精進すべきではあるまいか。(——高木貞治『近世数学史談』)

文頭にガウスの名前が出てきましたが、ガウスは16歳のある朝に、正17角形の(定規とコンパスによる)作図法を思いついたことで、数学を志すことを決意したと言われています。それがどんなに重要な出来事であったのか、今の我々は想像を逞しくするしかありませんが、おそらくユークリッド『原論』(第4巻命題16)に正15角形(これが『原論』に記された奇数の正多角形としては最大)の作図法が載っていることが関係していると思われる。



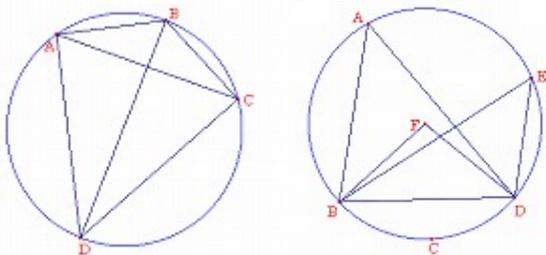
すなわち若き日のガウスの発見は、ユークリッド幾何を二千年ぶりに拡張させた出来事として、歴史的にも価値のある「帰納」だったのです。そのようなガウスは、「数学の考究においては何よりも妨げられざる、切り刻まれざる時間が必要である」とも述べています。これぞまさしくアルキメデスやユークリッドたちと同じ態度と言えるのではないのでしょうか。

さて、今学期の授業で扱っているテーマは「円」です。ユークリッド『原論』では第3巻にあたります。生徒たちの答案をここで紹介するにはあまりに「ページが狭すぎる」ので、上のような一般論を述べさせて頂きましたが、授業では特に以下の二つの問題に手ごたえがありました。

**第3巻命題22** 円に内接する四角形の向かい合う角の和は180度である。

**第3巻命題21** 弧を同じくし、円にその頂点が接する二つの角(円周角)は互いに等しい。

第3巻命題22と命題21の補助図



これらは実際には中学3年生で取り扱う問題ですが、単に現行のカリキュラムの都合そうになっているだけで、幾何の歴史から見れば、今の我々が3年生だから解けて、1年生だから解けないというのはナンセンスです。逆に3年生になれば、黒板で「答を教えてもらって」それを演繹、確認するだけに終始してしまいます。これでは本当の幾何の楽しみを味わうことができないと危惧し、最初のコロンブスの卵の話に戻ります。

どんなに時間がかかったとしても、「自分で解いた」ことには、何にも代えがたい達成感があります。そのように「帰納して発見することで生まれた自信」が、将来まだ誰も解いていないような問題を解く際に、もしかしたら有力な手がかりとなるやもしれません。(そのことは、最初に挙げた「バス停の問題」の答をもし自力で発見した人ならば、頷かれるものと信じます)。そう思うと、生徒たちが今クラスで、自分の力で押さなければ前に進めない問題に対して、「よし、今日も頑張ろう！」と張り切って向かってきていることには頼もしさを感じます。

ガウスが用いた印章には、一本の木に二、三個の果実がついており、ラテン語で *pauca sed matura*. (少ないが熟している) という句が刻まれていたと言います。我々もその精神を見習って、胸を張りたいと考えています。

(文責 福西亮馬)

## 『古文講読』(水曜3限)

担当 前川 裕<sup>ゆたか</sup>

『枕草子』を岩波文庫版で最初から順に読み進めているこのクラスは、10月半ば現在で35段くらいまで到達しました。いくつかの校注版を参考にして読み進めています。解釈が不明なところというのが予想外に多いことに驚かされます。また本文系統の間の異同も大変多く見られ、テキストの由来なども考えさせられます。

受講者はお一人ですが、着実に読み進めています。気軽に意見交換をしながら、当時の人々の感性や心性について思いを馳せています。清少納言の着眼点の面白さは、たとえばお寺での講話を聴く場面でありながら、話の中身には一切触れず、話すお坊さんの容姿を評価したり、また集う人たちの衣服や立ち振る舞いを細かく述べたりします。人間模様への関心の高さと、その描写のうまさは清少納言ならではのものです。教科書などでは触れることの少ない段からも、いろいろな面白さを得ることができます。

高校程度の文法をご存じであれば十分です。ご興味のある方はぜひ山の学校までお問い合わせください。

(文責 前川 裕)

## 『ラテン語初級文法AB』<sup>A (木 14:10~15:30)</sup> <sup>B (木 4限)</sup>

担当 山下大吾

今学期の『ラテン語初級文法』コースでは、それぞれ個性のある二つのクラスが開講されています。一つは従来のカリキュラム通り、即ち一学期三ヶ月間で基礎を固める B クラス、今ひとつは、同様の課程を B クラスの倍の期間、二学期で終えるという A クラスです。教科書は基本的に両クラスとも岩波書店刊田中利光著『ラテン語初歩 改訂版』を用い、時に他の文法書を参照しながら授業を行っております。それぞれお一方ずつ受講されています。

B クラスは言わば速習コースに当たるもので、毎回およそ四課ずつというペースで進み、それだけに一回の授業で学習する文法事項は多岐に渡ります。そのため受講生の方のご負担も相当なものと思われそうですが、練習問題の正答率も非常に高く、今のところ順調に進んでおります。お話を伺ったところ、かつて英語で書かれた入門書で勉強を志されたとの由、今回は再挑戦ということになります。

A クラスは受講生の方のご希望に沿った形で今回新たに開講されました。二学期合計 24 回というカリキュラムは、一般の大学で行われている初級文法のものより若干少ない程度と言えるでしょう。自身学部生時代に学んだ際の授業の進み方や、その折感じた疑問点を生かすことができればと思いつつ授業を進めております。今のところ時間に余裕があることから、B コースでは授業内に行っていない、受講生の方の自由選択とさせていただいている和文羅訳問題にも、なるたけ取り組みように努めております。

双方のクラスにおいても、現段階では文法事項の確認やその繰り返しという、大変重要なのですがどうしても単調な「作業」に終始してしまいがちです。その弊に陥らぬよう、息抜き、あるいはアクセントになればと望みつつ、その折々に適した文学作品の引用に助けを借り、あるいは英語などで見られる関連した語学的な話題をご指摘するよう努めております。また一対一という学習上非常に恵まれた環境ですので、少しでも疑問を持たれた場合、その都度遠慮なく質問されるようお願いしています。B クラスでは来月末、A クラスでは来学期末に無事ゴールを迎えられるようお願いしつつ、毎週楽しくも真剣な、ゆっくり急げの歩みを進めております。

(文責 山下大吾)

## 『ラテン語初級講読 B』(水曜 4限)

担当 山下大吾

今学期の『ラテン語初級講読』B クラスでは、引き続きキケローの『友情について』を読み進めています。受講生は変わらずお二方で、現段階で全体の半分を少し超えたあたりまで読了しました。一回の授業ごとの範囲は、当初の10数行からやや増えて20行弱に落ち着きつつあります。毎回変わらぬ密度の予習をされながら読む範囲が徐々に増えていくことは、受講生の方々のラテン語読解力が着実に上がってきているという何よりの証拠であり、講師たるもの、おこがましさを感じながらも、うれしさを毎回噛み締めているところです。

姉妹篇とも言える『老年について』の構成と同じく、本篇も中盤に至り、若き対話者であるファンニウスとスカエウォラの存在はいつしか背景に退き、老ラエリウスの独壇場となりました。彼の口を借りて、友情に対するキケローの熱き思いが冷静な論旨のもとに展開され、直接読者たる我々に訴えかけられてきます。その中では、語や構文、あるいは内容といった様々な「仕掛け」を通して、以前読んだ文章を鮮やかに思い起こさせる例に幾度も行き当たります。キケロー一流の散文の妙と言えるでしょう。また授業内での一エピソードになりますが、参照している邦訳の底本の読みと我々のそれとが異なる例が意外に多く、その原因を突き止めるには最新の刊本ではなく、19世紀に出たキケロー全集の校訂註に目を通さなければならないという、文献学的観点から見て貴重な体験を受講生の方々と共有する機会もありました。

受講生の方々は毎回、当日読む範囲のテキストを自ら筆写され、一つ一つの語にはその語の持つ意味や文法事項を書き記し、更には邦訳のみならず、底本に添えられた英語で書かれた註を参照され、そのような作業を経てなお残された疑問点を纏められた上で授業に臨まれています。その授業でキケローは我々にこのように語りかけます。「もし心労から逃げようとするれば、徳からも逃げなければならぬ。」心労をものともせず、徳を体現されたかの如き方々、キケローがこの対話篇を記した年齢と同じ世代、あるいはそれより上に属する世代の方々を前にして、決して背景に退くことなきよう心掛けながら、毎週三人でキケローの言葉を一語一語読み進めております。

(文責 山下大吾)

## 『ラテン語初級講読 C』(金曜 4限)

担当 前川 裕<sup>ゆたか</sup>

引き続きセネカ『ルキリウスへの手紙』を、2名の受講者とともに読んでいます。セネカは、いかに俗世に対処するかという点について、主にエピクロス引用をもとに語っていきます。世の中に追われるのではなく、自律的に生きよう、という呼びかけは、現代でも全く古くなっていないといえるでしょう。

毎回Loebで17行程度を読んでいます。受講者の習熟とともにだんだん読むスピードが上がってきました。少し時間が余ることもあるので、小ネタを用意して本文読解以外の楽しみ方も提供しています。例えば参考となる書籍の紹介や、古いラテン書写本を読んだりしています。普段、現代の活字ばかりを見ていると、写本の手書き文字は新鮮です。また特殊な用字もあり、パズルのように楽しみながら読んでいます。

初級文法を一通り学んだ方であればご参加いただけます。一緒にラテン語の世界を歩いてみませんか。

(文責 前川 裕)

第20回

## ラテン語のゆうべ

とき 11月26日(金)

午後6:30~8:00(参加無料)

講師 前川 裕(山の学校ラテン語講師)

場所 北白川幼稚園・第3園舎

演題 『2000年前の落書き~ポンペイの町の声~』

対象 ラテン語に関心のある方

## 『ラテン語入門・中級講読』（月4限・金4限）担当 広川直幸

入門の授業では、受講生3名とともに、Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* を用いてラテン語の基礎を学んでいます。この原稿を書いている時点で22課まで進んでいます。まだしばらくの間、接続法が出てきませんが、それで良いのです。大学で一般的に用いられている教科書のように、一通り直説法と命令法の説明をしたら、すぐに接続法の説明に移るというやり方は、文法の概略を俯瞰するためには役に立つでしょうが、(そして、本来そのような作業は新しい言語を学び始める前に自分で済ませておくべきことなのですが、) しっかりとした基礎を作ることにはつながりません。接続法を学ぶ前に、直説法と命令法を運用する力をじっくりと養っておきましょう。

中級講読では、ウェルギリウスの『農耕詩』を受講生1名と読んでいます。現在、3巻末尾のノーリクムの疫病の個所を読んでいます。凄惨な状況が緻密に歌われている個所です。このような嗜好はローマの作家の特徴であり、後世に大きな影響を与えています。3巻を読み終えたら、そのまま最後の4巻に進みます。1回に20行程度というゆっくりとしたペースで進んでいることもあり、『農耕詩』を読み終えるには、まだしばらく時間がかかります。とはいえ、『農耕詩』を読み終えたら『アイネーイス』に進み、ウェルギリウスを全て読むのがこの授業の目標です。

(文責 広川直幸)

## 『ギリシア語入門・講読AB』（火3・火4・金3）担当 広川直幸

入門の授業では、春学期に引き続き、受講生1名とともに、水谷智洋『古典ギリシア語初歩』を用いて古典ギリシア語の基礎を学んでいます。1回1課のペースで進めていますので、今学期は24課まで進みます。この授業では、和訳の練習問題を解くだけでなく、時間の許す限り、曲用と活用の口頭練習をしています。

講読Aでは、受講生2名とともに、J. J. Helm, *Plato: Apology* を用いてプラトーン『ソクラテースの弁明』を読んでいます。『弁明』は弁論であることもあり、プラトーンの他の初期作品よりもやや難しいのですが、そこは古典中の古典。内容の面白さに引込まれて読み進めています。今のところ1回に大体1ページ読んでいます。今後は、無理をしない程度にペースを上げる予定です。

講読Bでは、今学期は、J. A. C. T., *A Greek Anthology* を1回に大体40行のペースで読んでいます。この本は、その名に反して、韻文、散文の別を問わず、主要作品の面白いと思われる個所を集めた抜粋集です。初歩の学生を対象にしている本のはずなのですが、わりと説明が不親切なので、それを補うように授業をしています。受講生がこの本を通じて面白そうな作品に出会ったら、それに移るのが良いだろうと考えています。

(文責 広川直幸)

## 『英語一般』（木曜 14:10~15:30）担当 浅野直樹

この秋学期から午前や昼の時間帯のクラス（通称大人クラス）が新設されました。「一般英語」もそのうちの一つです。これは新しい取り組みなので、ここでは英語の内容そのものよりも、大人が英語を学習することそのものについて述べます。

大人が改めて英語を学習しようとするのは必要に迫られてのことが多いでしょう。グローバル化が叫ばれて久しい今日では、外国人と接する機会も珍しくありません。その是非は措くとして、外国人と意思疎通するためには英語を使う可能性が最も高いでしょう。実際、このクラスに通われている方も、職場にいる外国人の同僚と意思疎通を図りたいというのが通い始められるきっかけでした。

私自身が英語の必要性を感じた時のことも記しておきます。それは、このように英語を教えるという仕事をするということを別とすれば、読みたい本が英語でしか出版されていない時です。現在では目立った本であれば日本語に訳されることが多いですが、年単位でのタイムラグがありますし、必ず翻訳されるとは限りません。また、パソコンを便利に使うためにフリーソフトをインストールすることもあります。その時に不具合が生じてインターネットで調べて解決することができた時にも英

語が読める便利さを強く感じました。日本語でもある程度は調べられますが、パソコン関係のトラブルシューティングやFAQは英語のほうが圧倒的に充実しています。もちろん留学生と英語でやり取りをすることもありますが、ただ、日本にやって来る留学生は日本語ができることが多いので、そちらに頼ってしまいがちではあります。

このように英語がわかると便利だと言えます。しかし、実際のところは、日本で生活する分には英語ができなくてもあまり困らないと個人的に思います。英語ができないと務まらないような仕事はまだそれほどはありません。それでは必要性に迫られていない人は英語を学習してはいけないのでしょうか。そんなことはありません。英語を学習すること自体を楽しむという道もあります。

それでは英語の楽しみとはいったい何なのでしょう。それは人それぞれでしょう。私の場合は、英語を最初に学んだ時はわけがわからなかったのが、学習を積み重ねるにつれて理解が深まったのが楽しいと感じました。その楽しさを劇的に体験したのは単語を語源に従って解釈するというやり方を知った時です。高校を卒業した後でたまたま目にした本にそのようなことが書いてあり、初めはそんなものかと読み流していたのですが、英語を学べば学ぶほどその考え方の威力を感じるようになりました。ラテン語をもっと学べばその楽しみもさらに増える予感がします。

必要性和楽しさ、両方あるのが理想ですが、少なくとも一つがあれば英語の学習を続けられると思います。

(文責 浅野直樹)

## 『経済学入門』(月曜3限)

担当 百木 漠

「経済学入門」は9月から新しく始まった大人向けクラスです。「経済学入門」というと難しく聞こえますが、この授業ではいわゆるマクロ・ミクロ経済学の内容を教えるというよりも、日々の経済ニュースを分かりやすく解説していければ、と考えています。イメージとしては、最近テレビで人気の池上彰さんが行っているニュース解説を、経済的なトピックスに特化してやってみよう、という趣旨です。もちろん池上さんのような流暢な解説は僕にはできないのですが、少人数(マンツーマン)という形態を生かして、生徒の方と対話をしながら、柔軟に経済ニュースの解説を行っていければ良いなと考えています。

今のところはUさんとのマンツーマン授業ですが、保護者の方や他の先生方でも、もし関心ある方がいらっしゃれば、お気軽に参加していただければ幸いです。経済学の前知識などはまったく必要ないのでご心配なく。

第一回目の授業では、最近話題の「円高と為替介入」を取り上げました。最近の経済ニュースでは円高が話題になることが多いですね。9月15日には政府・日銀が6年半ぶりに為替介入を行ったというニュースがありました。為替介入の効果では一時的に円高が是正され1ドル=85円にまで戻ったのですが、これを書いている10月17日時点では1ドル=81円まで円高が進み、さらに政府・日銀が為替介入を行うかどうか話題になっています。

そこで第一回目の授業では、「政府はなぜ為替介入したのか? 為替介入ってどうやって行うのか? そもそもなぜ最近これだけ円高が進行しているのか?」といったテーマを扱いました。為替を考えるときに、経済学で最も基本になるのは「購買力平価説」という理論です。これは、長期的な為替レートは両国通貨の購買力(または物価)に比例して決まるという理論です。というとなかなか聞こえませんが、簡単にいえば、アメリカで1個1ドルでハンバーガーを売っていて、日本では1個100円でハンバーガーを売っていたとすると、為替レートは1ドル=100円に決まる、ということです。

この理論で考えると、日本では近年ずっとデフレ(物価が継続して下落すること)が続いているので、実はアメリカドルに比べて日本円の価値が高くなるのは、経済学的には必然の出来事なのです。最近FRB(アメリカの中央銀行)が大規模な金融緩和を行ったことでいっそう円高が進みました(アメリカで金融緩和→アメリカのマネーサプライが増える→ドルの価値が落ちる→円の価値が上がる)。同時期に日本も金融緩和策を実施したのですが(実質のゼロ金利復活というニュースがありましたね)、アメリカの金融緩和の規模には遠く及ばず、まだまだ円高は続きそうです。この調子でいけば、1ドル70円台に突入するのも時間の問題ではないでしょうか。

まだ授業が始まったばかりで、授業の進め方も手探り状態ではありますが、できるだけUさんとのたくさん会話するかたちで、経済ニュースを理解する面白さを伝えていければと考えています。

(文責 百木 漠)

## 『漢文入門』(月曜 17:10~18:30)

担当 村田 滯

今学期から開講した漢文入門のクラスでは、西田太一郎『漢文法要説』を用いて漢文の基本的な語法を学びながら、比較的平易な短文を読んでいます。

『漢文法要説』では、各文法事項に関して、古典文献から抜き出した豊富な用例があげられており、基礎的な構文を学ぶのに有益です。クラスでは受講者の皆さんに順に例文を訓読していただき、私から解説した後、質問にお答えするという形式をとっています。講読に用いる文章としては、前半は高校教科書に掲載されている訓点付きのものを使いますが、皆さんの習熟度を鑑みつつ、後半では句読点のみのテキストを使い、時折チャレンジとして白文も読みます。

漢文を学習する上で大切なのは「たくさん読む」ことです。それ以上に有効な方法は無いと言っても過言ではありません。できるだけ多くの文章に触れ、その経験を通して、語彙を増やし、漢文の持つリズムを体得し、一字一字が持つ本質的意味を帰納的に把握していくこと、各々の文章が持つ文脈のみならず、そこで使われている語句が時間軸上に持っている歴史的な脈をも理解すること、さらには、各文章が書かれた際の社会・思想・文化的背景を知っておくこと、これらができれば、どんな漢文でも自分で読みこなすことが可能でしょう。

しかしながら、いきなりたくさんの漢文を前にして読もうとしても、きっと途方に暮れることでしょう。このクラスではその前の準備段階として、漢文の基本的な構造に馴染んでいただけるようお手伝いすることを目標としています。  
(文責 村田滯)

## 『イタリア語中級講読』(月曜 18:40~20:00) 担当 柱本元彦

### 『イタリア語のすすめ』

昔、こんな映画がありました。偶然一緒になった多国籍の船客、四・五人が、昼食のテーブルを囲んで会話をします。ギリシア語、ポルトガル語、フランス語、英語、誰もがそれぞれ自分の国の言葉で話し、相手の言葉を理解する……。たしかにこれが理想だなと思いました。ありえない設定ですが、それは無理でも、せめて誰もが外国語を二つ理解することができたら、世界はもっと暮らしやすくなるに違いありません。

国際的なコミュニケーションの言葉としては、とりあえず英語があります。イタリア語は、なまくらなコミュニケーション・ツールですが、第二外国語として捨てがたい魅力があります。つまり、<現在>を見れば、料理やサッカーやファッション、ライフ・スタイルから映画や文学まで、イタリアは世界に欠かせない存在ですし、<過去>を振り返れば、西洋のどの国よりも豊かです。ヨーロッパを築いたのはイタリアでした。西洋の美術遺産の過半数はイタリアにありますし、音楽用語がイタリア語なものも周知のとおり。確かになまくらツールではありますが、<発信>のためにひとつ言えば、発音がとても簡単、まるで日本語を話すように話せます(英・仏・独語ではそうはいきません)。これはとても素敵なことじゃないでしょうか。(文責 柱本元彦)

## 『フランス語入門』(水曜 10:40~12:00) 担当 上尾真道

この秋から開設されたフランス語クラスでは、初めてフランス語を勉強されるというお二人の生徒さんとともに、文法の基礎を学んでいます。最終的な目的がフランス語での会話だということですので、なるべく実践面を重視しながら行っています。

さて、どんな語学でもそうですが、語学学習の山場は、その最初のステップ、つまり発音の種類と規則を学習するという段にあるでしょう。フランス語の場合、つづりと発音の関係が極めて規則的ですので、特に、この最初のステップでしっかりと発音に関する決まりごとを見つけておくことが重要となります。そうすれば、初めて見た内容の分からない文章であっても、とりあえず声に出して「読む」ことができるからです。そして、フランス語を声に出して読むことは実に楽しいものですので、この点さえ抑えておけば、フランス語学習の長い道のりにはいつでも楽しみが伴うということになります。

もう一点、フランス語学習の最初の段階について言うべきことは、「発音をカタカナに置き換えない」ということです。理由は、簡単で、カタカナで表される音と、フランス語の発音は、ほとんどの場合、それぞれまったくの別物だからです。したがって、なるべく音そのものをつづりを直接的にリンクさせる仕方で、フランス語の発音を身につける必要があります。昨今は、どんな参考書にも、さらには辞書にまで、CDがついていて、ネイティブの発音を確認できるようになっています。紙に書かれた文法のこともちろん大事なのですが、こうしたCDを積極的に聞いて、まず耳からフランス語に入っていくということを、今後の学習の継続のためにも是非お勧めしたいと思います。

(文責 上尾真道)

\*現在開講中のクラス以外にも、語学では『イタリア語(入門)』、『ロシア語(講読)』、『ドイツ語(入門/講読)』が可能です。お気軽にお問い合わせ下さい。

学校法人北白川学園 北白川幼稚園・山の学校 〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 41  
電話 781-3215 FAX 781-6073 (山の学校・幼稚園共通) 電子メール taro@kitashirakawa.jp